

---

# 真・恋姫†無双～雷の貴公子～

李俊刀燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜雷の貴公子〜

### 【Nコード】

N7554P

### 【作者名】

李俊刀燐

### 【あらすじ】

俺は少女を助けて死んだ。

気づくと俺は“無”の世界にいた。

一人の女性が立っていた

管理者「貴方は死んではいけない時に死んだのだから世界がちょっと崩れちゃったのよ」

おいおいまさかお決まりのパターンか？

管理者「だから貴方には違う世界に転生してほしいのよ」

キタアアアアア - - - (・ ・) お決まりのパターン

管理者「貴方にはこの中の世界から1つ転生させてあげるわ」

管理者「いい？一回しかいわないわよ」

???「ああわかった」

管理者「いくわよ、とある魔術の禁書目録、ゼロの使い魔、RPG  
(・ ・) RLD、バカとテストと召還獣、とらドラ、ナルト、メ  
ジャー、真・恋『真・恋姫十無双にしてくれ』・・・即答ね、いい  
わ、決まりね」

管理者「後はサービスとして能力をあげるわ」

俺は少し考えた。

???「決まった、超電磁砲 御坂美琴の能力をくれ」

管理者「わかったわ、後貴方の限界を無くしたから鍛えれば無敵に  
なるわ」

???「後1ついいか？」

管理者「これで最後よ？」

「???」わかった」

「???」日本刀をくれ」

管理者「お安い御用よ」

管理者「それじゃあ・・・いってらっしゃい」

「???」ああ、じゃあな」

そして俺は意識を失った。

こうして俺の恋姫十無双が始まった。

## プロローグ（前書き）

こんにちは、心機一転した李俊刀燐です  
よろしくお願いします。

## ブローグ

「んんん」

「ここはどこだ?」

俺は辺りをキョロキョロ見渡した。

そこは何もないただ“無の世界”だった。

???「・・・あははそうだ俺死んだっけ」

俺は苦笑してしまった。

???「まさか本当にこんな世界があつたんだな・・・」

俺は天国や地獄を信じないなぜかって?そりゃ科学で解明されてるから

だ。俺達人間は脳で考えたりしている脳が死んだらそこでお終いだ、脳の

意識がそこから天国や地獄に行くと思うか俺はそんなことおもわねえな。

これ同様神も信じねえ、民族戦争はともかく宗教戦争なんで俺にとつてはバカげてる、在りもしない神なんて信じて戦争ってマジありえない、神がいるって言う奴がいるなら俺に見せに来てって思う無理だと思つがな。

???「それよりあの子は大丈夫だろうか?」

そう俺はある少女を助ける為に死んだんだ。

〈回想開始〉

ピロロロー

駅員「二番線、普通列車東京行き、〇〇時に到着します」

???「やつと来たか待ちくたびれたぜ」

俺はあの日東京へ行く為に電車に乗ろうとしたんだ。

子供がホームで走り回っていた

きゃあきゃあ・・・

あんなところで遊びやがって親は何してるんだ？

俺はそう思いながら電車を待った。

駅員「まもなく、普通列車東京行き、二番線に到着します」

電車がはつきり見てきた

きゃあきゃあ・・・つるっトーン

男性「たっ大変だ女の子が落ちたぞ！」

???「ちっ間に合うか？」

電車はもう目の前だった。

俺は線路の飛び込んで少女を救出した、俺も上がろうとしたが間に合わなかった。

キイイイーーーーーグシャツ

そして電車に轢かれて死んだんだ

く回想終了く

???「多分大丈夫だろうな」

「・・・」

「・・・」

女性「ちよつと人の話を聞きなさいよ！」

???「ん？」

女性「何回私を無視したわけ？」

そこには少々お怒り気味の女性が立っていた。

???「あんた誰だ？」

管理者「・・・はあくまあいいわ、私は世界の管理者よ」



「???」「!!」

なんだこれ・・・まさかお決まりのあのパターンか？

管理者「貴方わね、死んではいけないところで死んだのそのおかげでちょ

つと世界が崩れちゃったのよ。」

管理者「だから貴方のは違う世界に転生してほしいの」

・・・キタアアアー（・・・）お決まりのパターン。

管理者「貴方にはこの中の世界から1つ転生させてあげるわ」

管理者「いい？一回しかいわないわよ」

「???」「ああわかった」

管理者「いくわよ、とある魔術の禁書目録、ゼロの使い魔、RPG（・・・）R L D、バカとテストと召還獣、とらドラ、ナルト、メジャー、真・恋・真・恋姫＋無双にしてくれ」・・・即答ね、いいわ、決まりね」

管理者「後はサービスとして能力をあげるわ」

俺は少し考えた。

「???」「決まった、超電磁砲 御坂美琴の能力をくれ」

管理者「わかったわ、後貴方の限界を無くしたから鍛えれば無敵に

なる  
わ」

「???「後1ついいか?」

管理者「これで最後よ?」

「???「わかった」

「???「日本刀をくれ」

管理者「お安い御用よ」

管理者「それじゃあ・・・いつてらっしゃい」

「???「ああ、じゃあな・・・ちょっと待ってくれ」

管理者「何?」

「???「あの子はどうなった?」

管理者「それは・・・秘密よ」

管理者「じゃっ改めていてらっしゃい」

「???「ちよつ待『バイバイ』」

そして俺は意識を失った。

## プロローグ（後書き）

改めてこんにちは、李俊刀燐です。

頑張っていきます、応援よろしくお願いします！

## 誕生、その名は公秦

再び目を覚ませるとそこは中華風の天井があつた。

俺・・・やつぱ恋姫十無双に來たんだな

俺「オンギヤア オンギヤア」

自分でも笑えてきたオンギヤア オンギヤアって自分で言っている  
くせに・・・なぜか笑えてくる

前の世界の赤子の時ってこんなのだったのかな

医者「旦那様、元気な男の子です」

父「でかしたぞ、春よ」

母「ありがとう、慎」

この2人が俺の新しい親か・・・

慎「後はゆつくり休め」

春「はい」

慎「よしこの子の性は公、名は秦、字は玄龍、そして真名は陸だ」

おつ結構いい名じゃねえか、ネーミングセンスはあるみたいだな親父。

春「いい名ね」

慎「この子の目は輝いている、きっと将来良い武将になるぞ」

春「そうかしら私は腕のいい軍師になるとおもつわ」

まつ期待にこたえて頑張るか・・・

・・・

月日は流れ5年後

タッタッタツ・・・

今俺は村の周りを走っている、1ヶ月前からしている為それほど疲れない。

慎「陸よ、今日から5周追加だ!」

陸「はっはい父上!」

5周か少しきついな何故きついかというと・・・手に10kg x 2足に15kg x 2を着けているからだ、5歳児に計50kgうつて鬼かと思うがそれをやったのける今の自分が怖い。

陸「はあはあ」

慎「よくやった陸よ、少し休憩したら組み手をしよう」

陸「はい父上」

・・・

慎「そろそろいいな」

陸「はい父上」

ちなみに今の主武器は双刀である。

俺は構えた、

陸「行きます！」

慎「来い！」

ガンガン

最初はなるべく親父に隙を見せないように攻撃していった

慎「ほう少しは腕を上げたな」

慎「だがまだまだ私には勝てんぞ」

今だ！一瞬隙を見せた親父を見逃さなかった。

俺はすかさず背後に回り全力の一撃を放った。

陸「！！！」

慎「今のはすごかったぞ当たっていたら負けてたかもしれんな」

俺の放った一撃は親父の剣によって弾かれた

俺は啞然とした・・・マジかどうやって弾いたんだ???

慎「隙だらけだぞ!」

そう言いながら親父は一撃を放った

陸「ちっさけられないか・・・」

俺は双刀でガードしたが抑え切れなかった。

グハッ

俺はその場に膝をついた。

慎「はっはっはっ、この公印5歳程度の子供になど負けんわ」

陸「まいった」

おいおい俺は5歳児だぞそこは笑うなよ親父・・・

春「陸くあなたくご飯よ」

慎「おおもうこんな時間か」

慎「先に行くぞ陸」

陸「はい」

俺は立ち上がり自分の家へ入っていった。

慎「おおー今日は麻婆豆腐かうまそうだな」

タッタッタ

陸「遅くなりました」

慎「おお、座れ陸よ」

陸「はい」

春「今日は麻婆豆腐よ」

陸「やったー」

ちなみに麻婆豆腐は俺の好物だ。

パクパクモグモグ

陸「母上、おいしいです」

春「ふふふ」

春「陸、ご飯食べたからお勉強よ」



陸「わかっています母上」

いまさらだが日課を教えよう朝は大体8時くらいに起きるその後朝食を取り9時から勉強を始める、1時頃昼食を食べ、2時頃から鍛錬が始まる、19時頃晩飯を食べ、20時から再び勉強が始まり23時に就寝するの繰り返しだ。

書室

春「今日は孫子をお勉強しましょう」

陸「はい母上」

・・・

こんなことの繰り返しで早7年がたった。

公秦12歳

ダッダッダッ

陸「親父終わったぞ」

ちなみに今は計150kgの錘をつけている

慎「おお、日に日に速くなるな」

慎「よしじゃあ、組み手をしよう」

陸「了解」

俺は構えた

慎「じゃあ私から行かせてもらっぞ」

陸「来い親父」

親父は飛び込んできた。

俺はすかさず左に避け、斬撃を放つ。

親父もその攻撃を予測している為軽がると受け止める。

俺は斬撃止めることなく放つ親父は俺の斬撃避けたり、受け止めたりしている。

ガンッキンッガキン・・・

ある程度攻撃してやっと思隙を見つけた。

そして親父が隙を見せた瞬間。

俺は技を放つ。

陸「烈火斬」

俺は2つの刀を交互に突くそして耐え切れなくなったと判断したら片方の刀を刃の無い方へ持ち替えおもいつき武器を叩いた

ガンガンガンガンン シュルルルグサッ

俺は親父の剣を叩いた後親父の喉元に刀を突いた

慎「まっまいった」

親父は降参した

陸「ふっこれで20連勝」

慎「12歳で私を超すとはさすが私と春の子だ」

陸「親父が弱いだけだ」

それを聞いて親父は悔しがった。

その後俺は自主鍊で山に入った。

陸「よしそろそろいいだろ」

俺はポケットからコインを出し指で真上に弾いたそして降りてきた  
コインを真正面に弾いた。

ビリビリ

キン

ビシューーーーーー

レールガン  
超電磁砲が放たれた。

陸「よし、調子がいいな」

陸「次はこれだ」

雷の力で砂鉄をかき集め剣状にした。

陸「鉄裂剣、黒鋼」

俺は鉄裂剣で木を切ったまるでチェーンソーで切ったような感覚がした。

陸「ん？もうこんな時間か・・・帰るか」

家に帰ると少々お怒り気味の母さんが立っていた。

春「陸いま何時だとおもっているの！母さんお前をそんな子に育てた覚えはありません！」

陸「すすいません自主鍛錬をしていたら遅くなりました」

おいおいその言い方定番過ぎるぞ。

春「早く上がりなさい」

陸「はっはい」

俺は家へと入っていた

慎「遅いぞ陸」

陸「すまん親父」

食卓には餃子と炒飯が置かれていた。

陸「おう、うまそうだないただきまーす」

パクパクモグモグ

陸「うまいやつば母さんの料理は漢一だ！」

春「そう、ふふふ」

慎「ところで陸よ」

陸「なんだ親父？」

慎「明日従妹が来る」

陸「へえゝえっ！！」

陸「いきなりかよ！」

慎「ああ、いきなりだ」

慎「それと1週間後ここを出ろ」

陸「！！」

意味が分からなかった。

陸「なんでだ？」

慎「友人の所に修行に行つて来いという意味だ」

陸「わかった、それで師の名は？」

慎「于吉だ」

陸「！！」

おい于吉って悪役じゃないのか？

陸「男性ですか？」

慎「いや女性だ」

おいおいマジかよじゃああの悪役于吉は偽物か？

陸「・・・わかりました」

俺は不安に思いながら床についた。

誕生、その名は公秦（後書き）

さて問題

従妹の名はなんだ？

1 公炎

2 公和

3 公琳

4 公泰

どれでしょうか？

従妹、公和現る！（前書き）

答えは2番 公和でした

わかった人いるかな？

それでは本文をお楽しみください。



従妹、公和現る！

〔陸sido〕

チュンチュン

「んゝ朝か」

「時刻は大体7時頃か」

今日は久しぶりに早く起きたそうだ。

「よし暇だし鍛錬でもするか」

俺は村を出て走りこみを始めた

ダッダッダ・・・

「ん？あそこに人影が・・・」

薄っすらだが剣を持った3人の男が見えた

「あれは賊か？」

「民が襲われてるのか？チツ仕方がない行くか」

俺は賊のいる方向へ駆けていった。

〔陸sido out〕

く 燐 s i d o く

「なんて今日は不幸な日なんだろう・・・」

今私は賊に捕まっているなぜかと言つと・・・

く 回想開始く

父「燐よ、もう少しで着くぞ」

燐「ふっやつと着くのね」

私は父の兄に会つべくはるばる遠方から来たのよ

私はドキドキしていたなぜって？従兄に会えるからよ

私は上気分で向かつていった。

ササッ

2人「!!」

突然賊が現れた。

私は愛刀の火龍偃月刀を持ち構えた

賊1「このガキいい武器持ってるぜ」

賊2「嬢ちゃんその武器渡してくれたら今回は見逃してあげるよ」

賊は笑いながら言った。

燐「嫌よ、この刀は公家の家宝貴方達みたいな賊に渡すものですか！」

賊3「調子に乗るなよくそガキが！」

賊は剣を振りかざした。

私はそれに反応して賊の剣を叩いた。

賊3「やるじゃねえか嬢ちゃん、だがこれを見な」

そこには賊に剣を向けられている父がいた。

父「すまん燐」

燐「父上！」

賊2「大人しく武器を下ろしな」

燐「くっわかつたわ」

私は刀を離した。

賊1「いい子だ人の話が分かる子は嫌いじゃないよ」

燐「父を放せ！」

賊1「いいだろうただし君がこちらに来たらだ」

燐「わかったわ」

〈回想終了〉

賊1「どうしますこの男」

賊2「約束通り放してやれ」

賊1「わかった」

賊1「ほら、自由だ」

賊1は父を解放した

その瞬間、賊2が父を刺した。

ガハッ

燐「父上！」

燐「貴様よくも父上を！」

賊2「ちゃんと解放してやったぜ死んだけどな」

賊たちは高笑いをした。

私は憎んだ無力の私を・・・

陸「てめえら、人を殺しておいて何笑ってやがるんだ！」

そこには私と同じ年ぐらいの男の子が立っていた。

賊1「何だガキうるせえぞ」

陸「てめえらは何故笑ってるか聞いてんだ！」

賊2「ガキは帰って床の間で寝てろ！」

陸「反省も悔いもないか・・・」

陸「俺の名は公秦、貴様らのような賊は俺が斬る！」

賊達は爆笑していた。

賊1「ガキが俺たちを倒すって何言って『死ね!』ブッシュギヤアアア」

男の子は賊1の心臓を刺した。

賊3「なっ・・・」

賊3は驚いて立ちすくんだ。

私はすかさず賊から抜け出した

賊2「殺っちまえ！」

賊3「おっおう」

陸「鉄裂剣、黒鋼！」

俺は賊3の剣を斬りそのまま首を刎ねた。

賊2「よくも！」

陸「死ね！」

ガンギイギイパキンッスッパ

俺は最後の賊の首を跳ねた。

気持ちが悪かった、吐きかけた、人を殺すことがここまで気分が悪くなるとは思わなかった。

陸「鉄裂剣解除」

タッタッタ

俺は少女に駆け寄った。

陸「大丈夫か？」

燐「あつはい、でも父上が・・・」

陸「俺がもっと速くに着ていれば・・・」

燐「いえ貴方のせいではありません、私が無力だったから悪いんです」

俺達はその後埋葬を行なった。

陸「俺の村に行こう」

燐「はい」

く村く

7時頃でも人は結構いた、俺は人目を避けながら進んだ。

村人達は俺の服に着いている返り血を見ていた。

く公家く

陸「ただいま」

春「おかえ・・・あなた！！来て」

慎「どうした？！！・・・陸ちよつと来なさい！」

陸「はい」

俺は事情を話した

慎「・・・そうだったのか」

慎「人を殺した感覚はどうだった？」

陸「最悪でした、気分も悪くなり、吐きかけました」

慎「それを覚えておけ、それが人を斬るということだ」

陸「はい！」

慎「それはともかくお前達の出会いは最悪だったな・・・」

陸「どういう事ですか？」

慎「お前の隣の子はお前の従妹だ」

2人「ええええええ！！」

慎「その火龍偃月刀は公家の家宝、私の弟の物だ」

2人は沈黙してしまった・・・

慎「陸自己紹介をしろ」

陸「はい」



陸「性は公、名は秦、字は玄龍、真名は陸よろしく」

燐「私は性は公、名は和、字は子項、真名は燐です、よろしく願います義兄さん」

陸「ああ、燐」

慎「・・・よし決めた陸その子を一緒に連れて行け」

慎「・・・はい」

俺は結局断ることも出来ず燐と一緒に于吉の所に行くことになった。

俺は1週間の間燐を鍛えた、結構着いてこれたのでLVがどんどん上がっていった。

そしてあつという間に1週間が経った。

そして別れの日

陸「親父、母さん行ってくる」

燐「伯父様、伯母様行ってきます」

慎「がんばって来いよ」

春「身体には気を付けてね」

俺達は故郷を出て師匠の元へ旅たったのであった。

## 従妹、公和現る！（後書き）

第2問 次作に登場する、初の恋姫キャラは誰でしょう？

1 桃香、愛紗、鈴々

2 華琳、春蘭、秋蘭

3 雪蓮、冥琳

4 恋

どれでしょうか？

・・・俺に才能があればもっとこれも面白くなるのになあ・・・はあゝ

## 遭遇、江東の小霸王（前書き）

正解は・・・3番、雪蓮 冥琳でした  
わかったかな？  
じゃ本文開始です。

## 遭遇、江東の小霸王

旅立って10日ほど経っていた、地図では後5日ほど歩けば着くらしかった。

今俺達は森の中をさまよっていた。

陸「本当にこの道であってるのか？」

燐「わかんない」

陸「はあ、仕方がないこのまま行くか」

燐「うん」

少し歩いていくと突然森を抜けた。

陸「ははは、マジかよちゃんと抜けやがった」

燐「・・・よかった」

そこは草原だった。

一面真緑の風景だった。

「・・・」

「・・・」

燐「あれ見て！」

陸「ん？」

俺は燐の向いている方向に顔を向けた。

陸「あれは・・・孫家牙門旗！」

草原には孫家の牙門旗が掲げられていた。

陸「賊退治か？」

俺達は興味を持ち戦場に近づいた。

く孫策 s i d o く

雪蓮「やっとこの日が来た」

私の胸はドキドキしていた。

今日はお母様無しの初めての戦、私は胸が高まっていた。

雪蓮「よし私に続け！！」

私は敵陣に飛び込もうとした。

冥琳「雪蓮何考えてるの、貴女は大将でしょ！！！！」

何時も通りに冥淋に叱られてしまった。

雪蓮「ぶうぶうだって今日は私の初陣なんだよ」

冥琳「それとこれは話が別です！」

私は仕方がなく下りた。

雪蓮「わかったわ、で策は？」

冥琳「あちらは1万、こちらは3万ですから左右の森に弓兵の伏兵を置きましょう、中央は少し前に出て右翼、左翼は中央を援護ある程度経ったら後退伏せていた弓部隊が後方から攻撃、その後混乱した敵を騎兵部隊が殲滅単純ですが賊相手なら問題ないでしょう」

雪蓮「わかったわ、その策で行きましょう」

私は部隊長を呼んだ。

雪蓮「弓部隊は左右の森に入り待機、左翼、右翼は中央の援護、中央は銅鑼が鳴ったら後退、伏せていた弓部隊が後方から攻撃、混乱した敵を騎馬部隊が殲滅以上よ」

部隊長「御意！」

雪蓮「聞け！！呉の兵士達よ！！呉の民を苦しめる賊どもを我々の力で根絶やしにせよ！！」

呉の兵『オー！！！！』

雪蓮「全軍、出陣!!」

呉の兵『オー!!!!!!』

（孫策sido out）

陸「やはり、賊退治か」

燐「うん」

俺達は木陰から戦を見ていた。

陸「数は呉が3万、賊が1万ぐらいだな」

燐「どちらが勝つと思う?」

陸「断然、呉だろう」

と俺たちが話していると

陸「ん?」

サッサッ

呉の本陣近くの草が音を立てていた。

陸「まっまずい、伏兵だ!」

陸「燐荷物持ってきてくれ」



燐「わかった」

俺は後の本陣近くまで駆け寄った。

陸「チツ間に合わねえ」

陸『鉄裂剣、狂弓』

俺は鉄裂剣を弓状にしてを刀を矢にして放った。

陸「間に合えええええ」

ビシュウーイングサツ「ギヤアアア」

2本撃ったが1本しか当たらなかった。

陸「あと一人」

陸「しゃあねえ、超電磁砲だ」

ビギューーーーーーン

「ギヤアアアアア」

一人は刀が胸に刺さり一人は丸焦げになった。

陸「ふう・・・間に合ったか」

燐「義兄さん、大丈夫ですか？」

陸「大丈夫だ、それより危なかったな」

丸焦げになった男は弓を持っていた。

陸「弓も鍛えなきゃな」

すると呉の本陣から兵を連れて黒髪で眼鏡をしている18歳ぐらいの女と桃色の髪と赤いチャイナドレスを着た18歳ぐらいの女が近寄ってきた。

（孫策 s i d o ）

伝令「敵の前線が崩れました！」

雪蓮「よし今が好機全軍進め！！」

呉の兵「オー！！！！」

雪蓮「これでこの戦も終わりね」

冥琳「ああ」

その瞬間

ビギューーーーーー

ものすごい爆音がした。兵達は混乱した。

冥琳「何があつた説明せよ」

兵隊長「申し上げます後方に不審な人物有りあの爆音はその者が起こしたと思われます」

雪蓮「・・・冥淋様子を見に行くわよ」

冥琳「雪蓮！！！」

雪蓮「大丈夫よ兵を連れて行くから」

冥琳「・・・」

私は冥琳の手を持ってその場所に向かった。

雪蓮「誰があんな音を出したのかしら」楽しみね」

冥琳「・・・まったく雪蓮は」

私が向かった先には12歳程度の少年と同年ぐらいの少女が立っていた。

「孫策 s i d o o u t」

冥琳「その者止まれ！」

俺達は呼び止められた。

（おっあれは少し若いけど雪蓮と冥淋か・・・）

俺達はそれに従いその場を動かなかった。

冥琳「お前達は何者だ！」

陸「俺達はただの旅の者です」

燐は怒鳴られたことに少々お怒り気味になっていた。

燐「失礼じゃないですか！貴女方を助けたのは義兄さんなのに・・・」

陸「燐やめろ」

俺は燐を止めた。

雪蓮「それはどういう事？」

燐「貴女方を狙っていた伏兵を義兄さんが倒したんです」

雪蓮「それは本当？」

燐「死体を見ればわかります」

そこには丸焦げになった死体と刀が刺さった死体があった。

冥琳「この鎧正しく敵の兵ね」

雪蓮「ごめんなさいね、疑ったりして」

陸「かまいません」

雪蓮「名はなんというの？」

陸「性は公、名は秦、字は玄龍です」

燐「私は性は公、名は和、字は子頂です」

雪蓮「性は孫、名は策、字は伯符、真名は雪蓮よ」

冥琳「雪蓮!!!」

雪蓮「命の恩人なんだから真名を渡すのは当然でしょ？」

冥琳「・・・しかし」

雪蓮「貴女も教えなさい」

冥琳「御意」

冥琳「性は周、名は瑜、字は公瑾、真名は冥琳だ」

陸「俺の真名は陸です」

燐「私は燐です」

雪蓮「ところでさっきの爆音はあなたが出したの？」

陸「・・・はい」

雪蓮「よかつたら見せてくれる？」

陸「わかりました・・・ですが秘密にしてくださいね」

雪蓮「わかったわ」

そして俺は袋からコインを出し指で真上に弾きその弾いたコインを今度は真正面に向かって弾いた。

ビリビリ

キン

ビギューーーーーン

その光が通過した辺りは地面がむき出しになっていた。

3人「・・・」

雪蓮「貴方何者？」

陸「俺は特殊な能力を持ってるんです」

雪蓮「特殊な能力？」

陸「具体的には“雷”の能力です」

3人「雷????」

陸「こんな感じです」

俺は手から電撃を放った。

ビリビリ

3人「・・・すごい」

雪蓮「確かに雷ね」

雪蓮「さっきの技は何て言うの？」

陸「超電磁砲です」

雪蓮「れーるがん？」

陸「手に雷を溜めてコインに向かって放つその雷の力でコインが光のような速さで放たれる仕組みはこんな感じです」

3人「???」

まあ理解できないのは当たり前だろう。

雪蓮「理解は余り出来なかったけど“すごい”ってことはわかったわ」

雪蓮「ところで貴方達私の所に来ない？」

陸「・・・すみませんこれから師の所に行くので・・・」

雪蓮「わかったわ、気が向いたら何時でも来てかまわないわ」

陸「ありがとうございます」

こうして俺が最初に会った恋姫キャラは雪蓮、冥琳だった。

俺達はその後呉軍から離れ師の下へ向かったのであった。



## 遭遇、江東の小霸王（後書き）

第3問、于吉先生の真名はなんでしょう？

1 火織

2 美琴

3 小萌

4 美鈴

・・・ヒントはお母さんキャラ  
さてもうお分かりですね。  
でわ次回をお楽しみに

到着、俺の師は美人でした（前書き）

・・・まさかの10000アクセス突破、応援ありがとうございます、駄作ですががんばっていきます。

正解は・・・4番美鈴でした。

一言言います

禁書目録系の名前を真名にしてあるのもあるのでそのキャラの好きな人すいません。

到着、俺の師は美人でした

あれから1週間後やっと目的地に着いた（結局5日では着かなかった）

陸「『頂清塾』、やっと着いたか」

燐「やっと着きましたね」

俺達は今『頂清塾』の前に立っている。親父に聞いた所于吉は女性だと聞いたが本当にそうだろうか？

コンコン

2人「すいませ〜ん」

男性「誰だ？」

男の声がして俺は少し警戒した。

2人「公印の息子（娘）です」

男性「中に入っているぞ」

男は扉を開けた。

2人「お邪魔しまーす」

中は結構広かった、他にも数名弟子がいた。

陸「貴方が于吉先生ですか？」

男性「いや俺は先生の1番弟子だ」

俺は少しほっとした。

男性「皆来てくれ」

弟子『はい（おう）』

男性「皆、この子らに自己紹介してくれ」

女子「はいじゃあ私から性は太史、名は慈、字は子義よ、よろしくね」

男子「俺は性は嘉、名は威、字は鋼典だ、よろしくたのむ」

女子「わっ私は性は延、名は礼、字は意薫ですよっよろしくお願いしますです」

男性「で俺が性は李、名は駿、字は刀淋だ、よろしく、ちなみに俺は14歳だ」

陸「俺は性は公、名は秦、字は玄龍だ、よろしく」

燐「私は性は公、名は和、字は子頂です、よろしく」

李駿「これからは同じ屋根の下で学ぶ者だ、仲良くいこう」

俺達はうなずいた。

李駿「ところで君達は武、文どちらを学びに来たんだ？」

陸「俺は両方だ」

燐「私は武を学びに来ました」

李駿「よし、じゃあ皆で歓迎試合をしよう」

弟子『はい（おう）』

俺達は部屋を出て広場に向かった。

く 広場 く

広場にみんなが集まり自分の武器を教えあつた。

李駿「俺の武器は双斧だ」

太史慈「私は碇槍よ」

嘉威「俺は刀もしくは短刀だ」

延礼「わっ私は弓です」

陸「俺は双刀だ」

燐「私は大薙刀よ」

李駿「じゃあ一回戦目は嘉威と公秦だ」

2人『おう』

俺は『紅』『藍』を構えた、嘉威は刀を構えていた。

李駿「よし始め!!!」

嘉威は始めの合図と同時に素早い動きで突っ込んできた、俺は2つの刀でかるうじて防ぐことが出来た。

ガンガンカンカン

陸「速いしかも正確に狙ってくるわ」

嘉威「速さと命中力だけは誰にも負けられん」

俺はなんとか攻勢に出ようと思ったが嘉威の斬撃に身をとられて中々出れなかった。

防勢のまま10分程度たった、だが俺達はまだ決着が付かなかった。

嘉威「はあはあ」

嘉威「粘るな」

ここで俺はきずいた嘉威の息が乱れていることを

そして一か八かの勝負に出た俺は嘉威の斬撃を何とかよけた瞬間

陸「烈火斬」

俺は嘉威ではなく嘉威の武器を狙って繰り出した。

ガッガッガガガキーン シュルルルルグサッ

嘉威「まいった」

陸「かつ勝った」

タッタッタ

嘉威は近づいてきた。

嘉威「公秦、お前強いな俺の負けだ」

陸「いやいや、お前こそ強かった」

嘉威「俺の真名は燎だ、よろしくな」

陸「俺は陸だ、よろしく頼む」

俺達は握手し真名を交換した。

李駿「第1試合勝者公秦！」

太史慈「すごつまさか嘉威を破るなんて・・・」

延礼「すっすごいですう」

李駿「第2試合、延礼対公和」

燐「よろしく」

延礼「よろしくです」

私は構えた、延礼も少し離れたところで構えている。

李駿「第2試合始め！」

始めの合図の途端矢の雨が降ってきた私は火龍偃月刀を回して矢を防いだ、防いでる間にも次々と矢は私を狙って飛んでくる、私は防ぎながら一歩ずつ延礼に向かっていった。

すると延礼は技を出してきた

延礼「爽燕陣です」

再び矢の雨が降ってきたしかも前より重い私は気づかなかったその雨が囷だということを私は雨を防ぐのに精一杯だった。

延礼「決めるです」

延礼が言った途端私は吹き飛ばされた。

延礼「勝ったで『まだよ』・・・すごいです」

私は何とか立ち上がった、多分義兄さんの特訓がなかったら終わっていた、でも特訓のお陰で何とか立ち上がることが出来た。



私は見逃さなかった延礼が驚いている隙に私は延礼の喉元に火龍偃月刀を突きつけた。

延礼「まいっただす」

燐「やつやったあ、勝った」

私は嬉しくなり飛び跳ねた。

延礼「公和は強いです」

燐「貴女こそ」

延礼「真名は乱ですう」

燐「私は燐よ」

私達は真名を交換し握手した。

李駿「第2試合勝者公和！」

陸「よくやったな」

俺は燐の頭を撫でてやった。

燐「ありがとう／＼／」

燐は少し頬を染ていた。

李駿「第3試合公秦対太史慈」

太史慈「よし私の番だ」

陸「よろしく」

太史慈は碇槍を構えた、俺もすかさず『紅』『藍』を構えた。

李駿「第3試合始め！」

太史慈は何振りかまわず突っ込んできた、例えるなら猪以上に、まっそんな突っ込みだから避けるのは容易かった。

陸「おわっ」

太史慈「どうしたの？怖気ついちゃったわけ？」

陸「いや突っ込むのは燎のほうが上手い」

俺は少し貶した言葉を言うと面白いように引つかかってきた。

太史慈「なんですって！私のほうが上手いわ！」

おいおいそんなんで怒るとは華雄以上だな、はあゝ

陸「だったら俺に傷を付けてみる」

太史慈「言ってくれるじゃない、ならやってやるわ！」

碇槍を無我夢中に振ってきた、避けたり受け止めたりしたが、一撃

一撃すごく重かった。

（この強さなら後数年すれば関羽と同格になりそうだが・・・はあ  
まずはこの超猪癖を何とかしないと）

陸「実に惜しい実に惜しいこの猪癖がなかったらもっと強くなれそう何に実に惜しい」

太史慈「誰が猪ですってええ」

太史慈はどんどん掛かってきた。

陸「お前以外に誰がいる？」

ブチッ

何かが切れたようだ大体予想が付くが・・・

太史慈「いいわ、アンタに私の本気を見せてあげる！」

太史慈「甲炎爆風！！！」

すると太史慈は槍を回し始めたその摩擦熱で火が点き槍が燃えていた、そして俺に向かって一振りした瞬間、爆風が俺を襲ってきた、俺はかるうじて避けたがダメージはすごかった。

陸「やっぱり惜しい、その力があれば有力な武将になれるのに・・・」

陸「そろそろ決めさせてもらう」

太史慈「やれるものならやって見なさい」

フツシュツ

太史慈「！！」

太史慈は反応したが遅かった。

陸「遅い！」

ガンツシュルルル~~~~グサツ

俺は碇槍を弾き太史慈の喉元に刀を突きつけた

太史慈「私が負けるなんて・・・」

太史慈「私の真名は美琴よ、受け取りなさい」

おいおい美琴ってあの美琴さんかよ確かに口調は似ているしルックスや髪型も似てるが美琴はちよつとまずいだろ・・・

陸「俺は陸だ、よろしくな」

美琴「べつ別にアンタを認めたわけじゃないんだから／＼／」

おいおい勘弁してくれ、あつちの美琴さんに被つちまう。

李駿「第3試合勝者公秦！」

すると1人の女性が立っていた。

「???」あら？貴方達何してるの？」

「???」今日は文学じゃなかったかしら？」

李駿「先生、新しい弟子が来たので歓迎試合をしました」

「???」あらそうなの？で新しい弟子は？」

李駿「この2人です」

そう言い李駿は俺たちを指した。

「???」私の名は于吉、お二人さんよろしく」ニコッ

おいおい、こっちもかよ、美鈴さんにそっくりだ

陸「美す・・・于吉先生よろしくお願いします」ニコッ

于吉「あら？なんで私の真名を知ってるの？」

陸「えっ」

おいおいマジかよ・・・

于吉「そう私の真名は美鈴よ、よろしくね」パチィッ

美・・・いや于吉先生はウィンクをした。

俺は少しドキドキしてしまった。

陸「俺は公秦　玄龍、真名は陸です」

燐「私は公和　子項、真名は燐ですよろしく願いします」

美鈴「公印さんは元気？」

陸「はっはい」

美鈴「ならいいわ」

俺達は項清塾に帰っていた。

こうして俺達の歓迎試合は終わったのであった。

到着、俺の師は美人でした（後書き）

第4問次回作は遠足に行きますさて行く場所はどこでしょう？

1 李家

2 延家

3 公家

4 太史家

さてどこだ？

里帰りに行くので2日まで更新しません・・・それでは来年会いましょう。さようなら

## オリキャラ紹介（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

駄作ですががんばっていきます、応援よろしくお願いします

\* 4 問目の答えは次回発表します。



## オリキャラ紹介

公秦 玄龍（陸）二つ名、？陵の雷、雷の貴公子

主人公、慎、春の息子現在17歳、性別男、現実世界の転生者、武を学ぶ為家を出る（強制的に）、口では愚痴ったり嫌だとか言っている割に悪を見るとその悪を排除しようとする。武器は双刀『紅』『藍』、日本刀『月光』大弓『水鏡華』燐の従兄である。帰郷した際、賊に襲われた故郷を見て、自らが漢統一することを決意する。義勇軍『雷神』頭首兼工作部隊総隊長、恋愛は自分から積極的だが、相手からだ鈍感。髪型は一方通行と同じ、髪色は黒、瞳も黒、身長は大体180cm、体重は67kg

得意なこと、好物

鍛錬、麻婆豆腐

嫌いなこと

偽善者、ガールズラブ（魏）

能力、御坂美琴の電撃使い（エレクトロマスター）の能力を持つ

必殺技、

超電磁砲  
レールガン

見たとおり御坂美琴の超電磁砲

鉄裂剣『黒鋼』『狂弓』

磁波で砂鉄を集め剣状にしたものちなみに剣以外の形にも出来る

烈火斬

双刀を交互に突き耐え切れなくなった武器を弾き飛ばす技

雷刃斬

日本刀に雷を貯め敵を切った際感電死させる技（制限でき殺さない場合は全身を一時的に麻痺させる）双刀で最初は技を出していたが過去の大虐殺の時封印した。

雷華雷翔陣

複数の矢に雷を貯め放つ技着地点から半径10m範囲に入る者全てを感電させる、MAXの場合は死ぬ

、

現実世界では董卓軍（特に恋）がお気に入りだった。

そのため董卓に進む

公和 子頂（燐）

公秦の従妹、現在16歳、性別女、11歳の時公秦の家に訪ねる途中賊に襲われ父を殺される、無力な自分を悔いている、愛刀は大薙刀『火龍偃月刀』公秦に好意があるがけして表には出さない。騎馬戦だと馬超と同格、義勇軍『雷神』將軍兼騎馬部隊総隊長、長髪、例えるなら馬超ヘア、髪色は茶髪、瞳は黒、身長170cmぐらい、体重は・・・女の子なので聞かないでください。

得意なこと

家事全般

嫌いなこと（物）

賊、陸が好意を持つ女、陸が自分以外の人に見惚れること

必殺技

翔光百裂斬

見えない速さで百回斬り最後に重い突きを放ち相手を吹き飛ばす技

太史慈 子義（美琴）

項清塾の生徒、現在18歳、性別女、于吉先生の2番弟子、根っからの武人、ツンデレ娘、武は関羽と同格、以前よりは猪は解消されたがまだ時たま癖が出る、武器は碇槍『雨爪』（あまつま）。ルックス、口調、髪型、性格、全てが超電磁砲の御坂美琴にそっくりでも別人、義勇軍『雷神』將軍兼歩兵部隊総隊長、身長170cm、体重・・・『あんた殺すわよ!』・・・以下略

得意なこと・趣味

魚釣り、料理 特に魚料理

嫌いなこと

勉強、于吉の説教

必殺技

甲炎爆風

碇槍を回し摩擦熱で炎をお越し相手に一振りし爆風を浴びせる技。

李駿 刀淋（汪牙） おうが

項清塾の生徒、現在19歳、性別男、于吉先生の1番弟子、文武両断の武人、項清塾の中で一番年上リーダー資質がある、武器は双斧『餓』『狼』ほとんど餓狼と呼んでいる。義勇軍『雷神』参謀長兼將軍、ルックスは・・・言い例えると一騎当千の楽みたい。身長190cm、体重107kg

得意なこと

意外にも裁縫、畑仕事

嫌いなこと（物）

悪人、女たらし（一刀）

必殺技

狼刃鋼空斬

重い斬撃を何度か繰り返し相手が怯んだ瞬間飛び上がり最初の斬撃よりも2倍重いクロス斬撃を繰り出す技、反動で周囲の敵も吹き飛ばす。

于吉（美鈴）

項清塾の先生、現在20歳後半、性別女、管理者に同じ名の人がい  
ましたがそれとは別人です、公印の元弟子、スタイルは抜群、武器  
は鉄刀鞭『黄炎華』、お母さんキヤラ、ルックス、髪型は御坂美鈴  
さんにそっくりだけど性格は大分違う、義勇軍『雷神』軍師兼將軍。  
身長170cm、体重・『ふふふ』 見えない圧力・以下略

得意なこと

誘惑、口説く、学問

嫌いなこと（物）

昆虫、蛇

必殺技

月蝶の舞

嘉威 鋼典（燎） りょう

項清塾の生徒、現在17歳、性別男、于吉の3番弟子、暗殺術や隠  
密系の技に長けている、腕は明命以上。武器は刀『黒影』短刀『閻  
陰』義勇軍『雷神』將軍兼暗殺部隊、隠密部隊総隊長、ルックス・  
・禁書目録の服部半蔵っぱい身長180cm、体重65kg

得意なこと

隠密行動、暗殺

嫌いなこと（物）

偽善者、悪人

必殺技  
影殺し

延礼 意薫（乱）

頂清塾の生徒、現在16歳、性別女、于吉の4番弟子、主に文学、武は弓のみだが腕は黄忠、夏侯淵と同格以上、メガネツ娘、公秦の弓の師、武器は大弓『翔光香』義勇軍『雷神』將軍兼弓部隊総隊長、身長は165cm、体重は・・・聞かない方がよさそうだ、髪型は初春風、ちなみに髪飾りはしていない、髪色は黒、瞳の色は黒

得意なこと・趣味  
読書

嫌いなこと  
弓以外の武術

必殺技  
爽燕陣

重い矢の雨降らせ、敵がそれを防いでいる内に貫通性の高い矢を敵めがけて撃つ技

## オリキャラ紹介（後書き）

まあこんな感じですが、義勇軍編はもう少しオリキャラが増えるとおもいます。

## 帰郷、壊された平和（前書き）

4 問目の答えは3番公家でした。

駄目作者なので一気に5年後です、外伝も書くつもりなので許してください><;



## 帰郷、壊された平和

燐「兄さん、あと少しですね」

陸「ああ」

俺達は故郷に向けて馬を走らせていた

美琴「アンタ、まだ着かないの？」

陸「もう少しだ、我慢しろ美琴」

美琴「わかったわよ、全くもう・・・」

美鈴「あらら、お二人さん本当に仲がいいわね」

美鈴先生は俺と美琴をからかった。

美琴「なっべつ別に陸とは仲良くないもん／＼」

美琴は少し照れながら言った。

汪牙「そういえば陸、お前の故郷どうなんだ？」

燎「俺も聞きたい」

陸「ああ、平和だよ、自警団もいるし」

2人「そうか・・・」(そういう意味じゃないんだが・・・)

乱「そう言えば陸さんって彼女とかいるんですか？」

男子2人(おおナイス、乱)

乱以外の女性「!!」

乱以外の女性達は一気に俺に注目した。

陸「えっいない、いない」

乱以外の女性達は安心した顔になった。

陸「ただ告白されたことはあるけどまっあん時は12だし気にしてはいない」

乱以外の女性(その女の子なんて強者何だろう)

何故皆で俺の故郷を目指しているかというと・・・

〈回想開始〉

あれから早5年俺の腕は呂布以上になっていた、公和も騎馬戦に関しては馬超と同格だろう。

そんなある日のことだ、俺達は美鈴先生に呼ばれて書室に来ていた。

2人「失礼します」

美鈴「おはよう」「ニコッ

やばい・・・やっぱ美しい・・・

バコッ

陸「痛っ」

俺は思いつきり燐に弁慶の泣き所を蹴られた。

燐「兄さん顔が赤いですよ？」

見えない圧力で語ってきた。

陸「・・・すまん」

この頃俺が女性に照れるとか顔を染めるとかすると直ぐ蹴って来るんだよな・・・何故だろうか？

美鈴「あら、お2人さん、今日も仲いいですね」

俺が蹴られてるだけでなぜ？仲がいいになるんだ？

燐「先生！」

美鈴「ふふふ」

先生は話題を変えた。

美鈴「ああ、そうそう明日遠足に行くわ」

2人「えっ???」

遠足って幼稚園児かよ・・・

陸「場所は何処ですか?」

美鈴「え」と場所は・・・『ちょっと待て』なに?」

陸「俺の実家じゃないですか!!!」

美鈴「せいかゝいよく分かったわね」

そりゃ自分の実家は覚えているだろう・・・

美鈴「実は他の生徒の実家も行くと思ったんだけど許可でたの貴方の家だけだったのよ」

親父、母さんなぜ許可した・・・家には何もないだろう・・・

美鈴「ってことで李駿達にも言っておいてね」

2人「はあ・・・わかりました」

こうして俺達は俺の故郷へ向かっていたのだった。

〽回想終了〽

陸「5年ぶりか、親父達元気にしてるだろうか」

燐「楽しみですね、兄さん」

陸「ああ」

そんな時だった。

ザッザッザッシュッ

当然30人ばかりの賊が現れた。

賊「お兄ちゃん達大人しく身に着けている物全てよこしな」

おいおい・・・マジかよ今日これで賊に会ったの3回目だぞ・・・

陸「はいはい、今日は見逃してやるから消えろ、こっちは急いでるんだ」

賊達は高笑いをした。

賊「はっはっはっ、お前今の状況分かって言ってるのか？」

陸「ああ、分かってるから言ったんだ」

陸「行くぞ皆」

全員『はい（おう）』

俺は賊を避けて進んだ、すると一人の賊が斬り掛かってきた

賊「無視すんじゃ・・・」

シュッ

俺は後ろに回りこみ手刀で首を叩いた。

ドズッ

・・・バタッ

陸「邪魔するなと言っただろ」

賊達『!!!』

賊「てめえよくも!」

陸「忠告したはずだ消えろと」

賊達は頭に血が上り襲い掛かってきた。

賊頭「くっ殺っちまえ!」

賊達『おう!』

5人が斬りかかって来たが容易く避け一番近い者に峰打ちした後4人は双刀で武器を弾き飛ばした。

陸「こんな程度か?身ほど知らずが」

俺は賊を貶した。

賊は美琴のように面白いほど掛かってきた。

賊頭「1人に何手こずってやがる、全員で行け！」

賊達『おっおっ』

さつきとはまるで違う返事だった。

まあ、賊程度10人来ようが100来ようが勝つ自信はあったが・

今度は全員で襲ってきたが双刀で軽々と倒していった。

そして・・・

陸「お前ら！」

賊達「ひっ」

捕まった賊達は絶望した顔になっていた。

陸「今日は見逃してやる、ただし悪事はもうするな！」

その言葉に賊達は泣きながら返事をした。

賊「あっありがてえ、あんたの名は？」

陸「公秦だ 覚えておけ」

賊「公秦の旦那本当にありがてえ」

陸「わかったら消えな」

俺が言くと賊達は一目散に去っていた。

陸「よしそれじゃあ行くか」

俺は馬を走らせた

すると汪牙が声をかけてきた

汪牙「なぜ奴らを殺さなかったんだ？」

俺は少し考えた後こう答えた

陸「それは・・・親父と母さんに汚れた姿見せられんだろ」

汪牙「それもそうだが・・・」

陸「大丈夫だ、次奴らが悪事をしていたら問答無用で殺すから安心しろ」

汪牙「・・・」

・・・2時間後

陸「そろそろだな」

段々道が懐かしい道に変わっていた。



俺は風景を見て懐かしんでた・・・そんな時

燐「兄さん、あれを見て！」

俺は燐が指を指した方向をすぐさま見た。

俺が見た方向には煙が上がっていた。

陸「・・・あそこは村の辺り！親父、母さん！」

俺は無我夢中に風のように馬を急がせた。

村に着いて俺に写った故郷は見るも無残だった、殆どの家は焼かれ、そこら中に死体があり焦げ臭いと死臭が混ざっていた。

陸「・・・親父、母さん」

すると1人の女性が近寄ってきた、懐かしい良く母さんを長話をする隣のおばちゃんだった。

おばちゃん「こつ公秦君？何時帰ってきたの？」

陸「今さつき着いたばかりだよ」

そんなことより俺は親父と母さんが生きているのかを聞いた。

おばちゃん「申しにくいんだけど・・・」

陸「いいから言ってくれ！」

俺は怒鳴ったもう村人が全員気づくほどに・・・

おばちゃん「公印さんは死んだよ・・・」

陸「えっ・・・親父が・・・何で何で死んだんだよ！」

俺はおばちゃんに聞かされた。

3月前から北の廃村を根城に賊が現れたこと

親父率いる自警団が何度も賊から村を守ったこと

昨日夜襲があつたこと

最初は自警団が勝っていたが子供を人質に捕られ解放の条件に親父が殺されたこと

その事により形勢が逆転したこと

俺は全てを聞かされた。

そしてようやく燐達がやって来た。

村の状況を見て燐達は啞然としていた。

汪牙「ひでええ」

燎「・・・許せねえ」

乱「・・・酷すぎです」

美鈴「・・・もう少し早く着ていれば・・・」

美琴「何なのよこれ・・・」

燐「・・・伯父さんと伯母さんは？」

・・・

陸「そうだ母さんは？」

おばちゃん「生きてるけど今夜が峠ってお医者様が・・・」

そして等々・・・

・・・ブチッ

俺の頭の中の何かが切れた

陸「おばちゃん、奴らの根城、北の廃村って言ったね」

おばちゃん「ああそうたよ・・・あんたまさか！」

陸「そのまさかだよ、燐！お前の馬貸せ！」

俺は怒鳴った、村人全員が注目したが気にしなかった。

燐「嫌・・・私も行く」

陸「・・・わかった」

汪牙「俺も行かせてもらっぜ・・・拒否選択は無しだ」

燎「・・・同じく」

乱「私も行きます!」

美琴「絶対に許さない!」

俺達6人は決意した

美鈴「待ち『留守お願いします、美鈴先生』・・・待つて」

美鈴先生は俺達を止めようとしたが俺は耳に入ってなかった。

俺達は急いで馬を走らせた、目的地、北の廃村に向けて・・・

## 帰郷、壊された平和（後書き）

5 問目次回に出てくる賊の数は何人だ

1 1 0 0 0

2 3 0 0 0

3 5 0 0 0

4 1 0 0 0 0

さてどれでしょ・・・パクリと思われても仕方ないと思います、パクリと思う作者の方すいません；；

**決意、義勇軍結成（前書き）**

5 問目答えは2番3000人でした。

それでは本編をどうぞ。

## 決意、義勇軍結成

俺達は無我夢中に馬を走らせていた、目的地北の廃村は後半里程度で着く

陸「親父・・・絶対に仇取ってやるからな」

燐「あんなにいい人だったのに・・・許さない！」

汪牙「これだけは言っておく理性を失うなよ陸」

陸「ああ、わかってる」

汪牙「理性を失った時点でお前は賊と一緒にになるからな」

陸「くどい、わかってるそんなこと」

汪牙「ならいいが・・・」

陸「・・・もし理性が無くなったら俺を斬れ」

汪牙「わかった」

・・・

く北の廃村く

陸「燐以外は馬を下りたほうがいいな」

なぜ燐を馬から下ろさないかというと・・・馬無しだと優秀な兵士程度だか・・・馬に乗せると一変し馬超クラスになるからだ。

それに軍馬は燐の馬だけだしな。

燐以外『わかった』

俺達は馬を森に隠し村の前まで来た。

門番「何だおめえら？」

陸「ちよつと賊頭に用があつてな」

門番「なんだ頭に用があるだつて？」

陸「ああ、こう伝えてくれ」

門番「??」

陸「公印の息子・・・いや悪魔が来たとな！」

門番「なっあの自警団長の息子だと！」

陸「ああそつだ・・・」

門番「てっ敵『話は終わりだ、あの世にいきな』・・・ギヤアア」

俺はそう言い門番に刀を刺した。



その断末魔を聞き3000程度の賊が出てきた。

・・・親父、3000人相手で村を守ったのか、俺・・・親父の事誇りに思っぜ。

陸「皆行くぞ！」

5人『おう』

賊「・・・誰だてめえ！」

陸「俺の名は公秦、お前らが殺した公印の息子だ！」

陸「今日はサービスしてお前らにいいものを見せてやろう」

賊「なんだいい物ってのは？」

陸「これだ」

俺は袋からコインを出し指で真上に弾き今度は真正面に向けてコインを弾いた。

ビリビリ

キン

ビギユウウーーン

超電磁砲で俺の真正面にいた100人程度の賊を吹き飛ばした。

賊「・・・なっなんだ今のは」

陸「賊などに教える義理はない！」

陸「皆行くぞ」

5人『はい（おう）』

美琴「甲炎爆風！」

汪牙「狼刃鋼空斬！」（最初重い斬撃を繰り出し相手が怯んだ瞬間飛び上がり最初より2倍重いクロス斬撃を繰り出す技・・・その反動で周囲の敵も吹き飛ばす）

燎「・・・影殺し」

乱「爽燕陣」

燐「翔光百裂斬！」（目に見えない速さで100回斬り、最後に重い突きををだし相手を吹き飛ばす技）

5人の放った技で賊の数は半分になった。

賊頭「くっ怯むな、相手はたかが6人だ」

奴が頭か・・・その命もらっ！

俺は新技『雷刃斬』を繰り出した。

雷刃斬とは・・・刀に雷を宿し、宿った刀で斬り感電死させる技（制限ができ殺さない場合は一定の時間麻痺させる）

賊頭は断末魔の叫びとともに絶命した。

それを見た賊達は一気に顔が青くなった。

そこで俺は一言言った。

陸「頭は倒した・・・普段は降伏を要求するが・・・今回は殲滅戦だ、全員生きて帰れると思うなよ！」

その言葉に賊は次々と逃げ出した。

俺は構わず斬った、斬りまくった。

・・・

ふと見ると死体の山が出来ていた。

臭かった苦しかった痛かった

俺は仇を取ったはずなのに悲しかった。

俺は泣きながら言った。

陸「皆・・・仇を取ったのに何故こんなに悲しいんだ・・・」

皆は俺から目を離していた。

陸「汪牙何故理性を失った俺を殺さなかった？」

少し沈黙の後汪牙は語った。

汪牙「泣いていたんだ」

陸「えっ？」

汪牙「お前は泣きながら殺していたんだ、それを俺は見るに耐えなかった何も出来なかったんだ」

陸「・・・そうか俺は泣いていたのか・・・」

その後数分間沈黙した。

そして俺は決意した

陸「皆聞いてくれ・・・俺はもう俺みたいな人を増やしたくないだから俺自らが漢を統一し二度と俺のような人を出さない国を作りたい・・・だから皆力を貸してくれ」

俺は頭を下げた

汪牙「当然だ、俺の命お前に預ける」

燎「・・・当たり前だ」

乱「一生貴方に付いていくです」

美琴「・・・わかってるわよそんなこと」

燐「兄さんの未来ため、手伝わせてください！」

燐「ところで何から始めるんですか？」

陸「まずは義勇軍を創る」

汪牙「なぜだ？」

陸「たとえ俺達6人で国が作れたとしても6人だけじゃ国は平和に出来ない・・・だからまず最初は軍を創るんだ」

汪牙「わかった」

その後俺は誓いを言った。

陸「我ら、血が繋がっていなくても、志は皆同じ、我らの手でこの国を平和な国に替えること、ここに誓う！」

俺が双刀を天にかざした後仲間達が次々と自分の武器を俺の双刀に重ねた

5人「ここに誓う！」

陸「これで義勇軍結成だ！」

5人『はい！（おう！）』

陸「名はどうしたらいいか・・・」

汪牙「『雷神』だ」

汪牙は即答した。

陸「なぜだ？」

汪牙「お前に相応しいからだ、お前が戦う姿は正に雷神だったからな」

皆も頷いた。

陸「わかった今から俺達は義勇軍『雷神』だ！」

5人『おー！』

こうして俺達義勇軍『雷神』が始まった。

**決意、義勇軍結成（後書き）**

6 問次回手に入れる日本刀の名は？

1 月光

2 日光

3 光聖

4 光神

さてどれでしょう？

帰宅、母に渡された物（前書き）

6問目の答えは1番月光でした。

本文をどうぞ^^

今回は短いです。



## 帰宅、母に渡された物

俺達は村に帰るため馬を走らせていた。

汪牙「美鈴先生にどういえばいいか・・・」

陸「大丈夫だ、叱られたら皆で謝ろう」

美琴「・・・いやだなあゝはあゝでも仕方がないか・・・」

燎「避けては通れんだろう・・・」

乱「・・・ブルブル」

俺達は昔美鈴先生本気で怒らせた事がある、その時美鈴先生は笑顔で鉄刃鞭で叩いてきたあれは本当に恐ろしかった、特に女子陣はトラウマになっている。

燐「大丈夫、先生はわかってくれるよ・・・多分」

俺達は怒られないようお願い馬を走らせた。

ゝ村ゝ

俺達は馬を止め、公家へ向かった。

途中、村人達は歓声を上げ迎えてくれた。

老人「無事じゃったか」

子供「お兄ちゃん達すごい」

女性「これでこの村も平和になるわね」

すると隣のおばちゃんがやってきた。

おばちゃん「あんた達よく帰ってきたねえ、おばさんとても心配したわ」

陸「ああ、大丈夫賊は俺達で殲滅したよ」

おばちゃん「本当かい？さすが公印さんの息子さんだね」

陸「俺そろそろ母さんの所行きたいから話しは後でね」

おばちゃん「ああ、ごめんね」

俺達はおばちゃんと別れて再び公家に向かった。

公家の前に先生は立っていた、俺達に気づくと近寄ってきた。

美鈴「・・・」

美鈴先生無言は右手を上げおもいつきり俺の頬を叩いた。

パシィンッ

美鈴「貴方達、仇を取って満足した？・・・賊を倒してスッキリし

た？」

先生は怒りながら語った、俺は自分で感じた事をはっきり言った。

陸「いえ、逆に悲しくなりました・・・」

先生は怒りの表情を

美鈴「仇を取ったって何も変わらないことが分かったみたいね」

全員『はい』

少し沈黙した後

美鈴「・・・本当に心配したんだから・・・無事で帰ってきてくれて嬉しい」

美鈴先生は俺達にに抱きつき、泣いた。

陸「・・・先生俺決『それはお母さんの前で言いなさい』・・・わかりました」

先生は真剣な眼差しで言った。

俺は理解し母さんの所へ行った。

公家を見ると無残だった、家は焼かれ、畑を荒らされ、唯一被害が少なかったのは馬小屋だけだった。

「公家、馬小屋」

母さんは馬小屋の中に簡単なベットを敷き横たわっていた。

医者「おお、公秦君よく来た、お母さんに顔を見せてあげなさい」

陸「わかりました」

俺が近づくとそれに反応したかのように母さんが起きだした。

春「・・・陸」

陸「母さん!」

春「陸・・・大きく遅くなったわね」

陸「・・・母さん俺家に居た時よりももっと強くなったよ」

春「それはよかったわ」

陸「後・・・親父の仇も取ったよ、だから安心してくれ」

春「貴方・・・あの数の賊を倒したの?」

陸「うん、俺だけじゃなくて、師の弟子と共に戦って倒した」

春「やっぱり、お父さんが言っていた風になったわね」

陸「??」

春「貴方が生まれた時、慎さんが言ったのよ、“この子の目は輝いている、将来きっと良い武将になるぞ”って言ったのよ」

・・・ああ、あの時か、懐かしい・・・

春「慎さんも天国で息子の成長を喜んでいると思うわ」

陸「うん」

春「貴方・・・これからどうするの？」

俺は先生と母さんに自分のこれからを話した。陸「母さん、先生聞いてくれ」

陸「俺は・・・もう二度と俺のような民を出さない為に俺自らの漢を統一して昔のような平和な国を創りたいんだ・・・だから先生力を貸してください」

先生は少し沈黙した後笑顔で頷いてくれた。

美鈴「・・・わかつ・・・いえ、わかりました主よ私は主に一生付き添います」

先生はこの時代でいう忠誠の誓いを俺にした。

陸「先生・・・主じゃなく今まで通り陸でいいです」

美鈴「なりません、貴方は私の主です、先生ではなく美鈴とお呼びください」

俺は先生・・・いや美鈴の勢いに負け俺は承諾した。

陸「先・・・いや美鈴わかった」

一方は母さんは泣いていた。

陸「母さん、何で泣いているですか？」

春「嬉しいからよ、息子がこんなに成長して」

そう言いながら母さんは懷から地図のようなものを出した。

春「これを貴方にきつと役に立つわ」

そう言いながら俺に地図を渡した。

陸「・・・これは何の地図ですか？」

春「それは貴方自身で考えなさい」

春「貴方は行きなさい、私は疲れたから少し寝るわ」

陸「わかりました母さん、俺行つて来るよ」

そう言い俺達は外へ出た。

地図を開くとどうやら西の森の地図のようだった。

俺達は地図に従い西の森を目指したのであった。



帰宅、母に渡された物（後書き）

7 問、地図に示されていない物はなんでしょう？

1 石碑

2 池

3 遺跡

4 洞窟

さて、どれだ？



**財宝、没落した古の王家（前書き）**

7 問目の答えは・・・3 番遺跡でした。

この頃更新しなくてすいません><

それでは本文をどうぞ^^

## 財宝、没落した古の王家

「西の森」

俺達は地図に示された通りに進んでいた、この森は昔よく超電磁砲の練習をしていた懐かしい場所だったため、意外と迷わずスムーズに行けた。

陸「この地図の最初に描かれてたのはあの拳岩か、懐かしい」

燐「そうですね、兄さん」

燎「??」

陸「俺と燐の修行が終わった後よく帰りに拳岩の隣の木の木の実を採って帰りながら食べていたんだ」

汪牙「・・・なら迷う事もなさそうだな」

陸「ああ、心配ない」

そう言い歩いていくと拳岩に着いた。

拳岩の隣には大きく立派な木が立っていて緑の葉が綺麗生い茂っていた。

陸「この木だこの木、今はまだ夏だから実は付けていないが秋には綺麗な赤い色の実を付けるんだ」

俺は木に手を付けながら言った。

美鈴「本当に綺麗ね、秋が待ちどろしくなるわ」

美鈴は微笑みながらこつちを見た。

・・・なんて綺麗なんだろう。

バコッ

ギユウウウ（雑巾絞りの音）

燐・美琴『顔が赤いですよ（わよ）兄さん（陸）』

燐に何時も通りに弁慶の泣き所を蹴られ、美琴に左腕を雑巾絞りされた。

くっ今日は2人かよ・・・たつく不幸だ・・・

陸「痛ててて、そろそろやめろ美琴」

美琴「いやだ、私と燐に謝らない限り」

なんで美鈴を見ただけで謝らないといけないんだ・・・はあゝ。

俺は仕方がなく謝った

陸「・・・すまん」

そう言つとやつと左手を放した。

乱「そろそろ次の場所に行かないとです」

陸「ああ、そうだな」

俺は再び地図を開いた。

陸「次に示されている場所は・・・池？・・・この森に池なんかあったか燐？」

燐「え？知らないんですか兄さん、この先の一本杉を左に行くと池がありますよ」

・・・そうだったのか、知らなかった。

燐「修行の後よく入ってました、池というより温泉ですが」

燐以外の女性『！！』

美琴「早く、案内して燐！」

美鈴「ふふふ」

乱「・・・入りたいです！」

女性陣を先頭に温泉に向かったのであった。

燐の言われたとおり、少し先に一本杉があり、それを左に進むと独特な硫黄の臭いがしてきた。

〈男性陣 s i d o〉

陸「近いな」

汪牙「ああ」

燎「着いたらどうするんだ俺達？」

2人『・・・』

陸「一緒に入るなんで論外だが・・・」

2人（いや・・・お前なら大歓迎だろう・・・）

燎「俺達2人は女性陣が出るまで組み手でもするか」

汪牙「おっおっ」

陸「・・・ちょっと待て、俺はどうすればいいんだ！」

燎「そんなこと自分で考えろ、鈍感モテ男が」

・ は？鈍感モテ男？俺の事なのか？？てかなぜ現代語を知っている・・・

結局俺は1人で鍛錬する事になった。

〈男性陣 s i d o o u t〉

く女性陣 s i d o く

美琴「んんん、温泉かゝ楽しみ」

美琴は鼻歌を歌いながら上機嫌で向かっていた。

美鈴「・・・どう誘うかしら？ふふふ」

美鈴は誰かさんをどう温泉に誘うか迷っていた。

乱「・・・やっただす、お久しぶりのお風呂です!!」

乱はハイテーションで歩いていった。

燐「・・・あの誘惑女から兄さんを奪い返さなければ・・・」

燐は兄をどう振り向かせばいいか考えていた。

く女性陣 s i d o o u t く

・・・

そして・・・温泉に到着した。

燎と汪牙は組み手をしにいった。

そして俺は取り残された・・・

陸「俺も行ってくるか」

燐「待つてー」一緒に入りましょ、ふふふ」・・・」

燐が何か言おうとした時、美鈴が横から俺を温泉に誘った。

陸「俺は女性陣が出てからでいいよ」

美鈴「だめよ、女性のお誘いを断るつもり？」

・・・だめだ、美鈴や美琴と一緒に入ったら絶対に理性を失う・・・

陸「・・・」

美鈴「それとも私の裸見たくないの？」

・・・やべえ、想像しただけで鼻血出そう。

陸「俺男だから・・・」

少し沈黙の後

美鈴「私魅力ないのかなあゝはあゝ」

美鈴は残念そうに顔を下げたと思ったら服を少しずらした。

陸「○ \$」

俺は奇声をあげてしまった・・・なぜかって？そこは言わなくてもわかるだろ。

美鈴「あらら、どうしたのそんなに赤くなって？」

白を切った様子で美鈴は話しかけてきた。

それを見ていた燐ははっと我に返り・・・

燐「私だつて！」

そう言い真似して服をずらした。

陸「・・・わかった入るから服を戻してくれ！」

・・・結局、二人と一緒に入ることになった。

なぜ断れなかったかつて・・・美人の2人をお願いされて断れるか？しかも誘惑付で、それでも断れる奴は多分ゲイか熟女好きくらいだろう。

その後、女性陣にまぎれて1人恥ずかしながら温泉に入ったのだった。

・・・

そして・・・2時間後、再出発したのだった。

陸「次に書かれているのは石碑？そんな物あったか燐？」

燐「私も知らない」

俺達は結局地図頼りで進んでいった。



示された通り進んでいくと

少し開けた場所に出た、そこにはひっそりと石碑が建っていた。

陸「これか・・・」

燐「何か書かれてる・・・古代文字？」

石碑には文字が書かれていたが欠けていて読める状態ではなかった。

乱「次はどこです？」

陸「ああ、そうだったな」

最後に示されていたのはこの先の洞窟だった。

陸「この先の洞窟で最後か」

燎「それなら早く行こうぜ」

俺達は最後に示された洞窟に急いだ。

・・・

そこにはただ壁が建っていただけだった。

燎「チイツ 最後の最後で行き止まりかよ」

乱「残念です・・・」

汪牙「場所を間違えたか？」

美琴「なんでないのよ！」

俺は壁に近づき壁を触った。

・・・ニヤッ

陸「帰るのは少し後だ」

そう言い俺は壁を双刀で斬った。

陸以外全員「！！」

そして燎が語った。

燎「隠れ身の術か・・・」

そう洞窟は紙で書かれた壁に隠されていたのだった。

込んだ事やるじゃねえか。

俺達は洞窟の中に入っていた。

・・・

そこには財宝が置かれていた、多分袁家の財産にも勝てそうだった。

金、銀、真珠、瑠璃、などの宝が光り輝いていた。

陸「すごい・・・公家って一体何者なんだ？」

特に女性陣は目が輝いていた。

美琴「きつ綺麗・・・」

美鈴「あら、この指輪美しい」

乱「・・・すごいです！」

燐「・・・この髪飾りいいな」

ふと横を見ると2つの武器が飾られていた。

一つは大きい弓、もう一つは黒い鞘の日本刀

そして隣の机に2枚の手紙が置かれていた。

俺は一つ手紙を見た、そこに書かれていたのは・・・

・・・

公秦へ

お前がこれを見ている時は重大な決意をした時だろう。

この洞窟にあるものの全てが今からお前の物になる。

その覚悟は出来ているか？ けして誤った使い方はしてはならんぞ。

そこに置かれているのは日本刀『月光』と大弓「水鏡華」だ。

月光は昔私達の先祖様が救いになった異国の者が渡したものだ、お前ならうまく使えるだろう。

そしてもう一つは昔公家に仕えていた武将の忘れ形見だ、その者の弓の腕は天下一品と言われている、これに相応しい者に渡してやれ。

最後にもう一度言っぞ、本当にこれを受け取る覚悟は出来ているか？ 出来てなければ立ち去れ

公印

・・・

親父・・・大丈夫だ覚悟は出来ている、俺必ず天下を取るから見ていてくれよ親父。

そして俺はもう一つの手紙を見た

・・・

子孫へ

その宝を見て驚いたであろうしかし安心せよ正真正銘公家の宝じゃ。

この宝を受け取る前に公家の真実を教えねばならん、覚悟は出来て

いるか？

実わな公家は古に没落した王家なのじゃ・・・驚いたであろうしかし眞実じゃ。

公家の始まりはのう、古の王の弟が権力争いに嫌気が差してな、この地に身を潜めて住んだのじゃ、王の弟は自らの名を捨て新しく公陣名乗ったのじゃ、そうこれこそが公家の始まりじゃ。つまりお主は王家の血を引く者じゃ

このことを踏まえて、王家に恥じない使い方をするのじゃぞ！

公家3代目公炎

・・・

嘘だろ・・・公家が没落した王家だったなんて・・・

そして俺は両方とも皆に見せた。

皆の反応はさまざまだった。

燐「えっ！私に王家の血が流れているの！」

汪牙「まさかな・・・」

美琴「えっ！！嘘でしょ・・・」

美鈴「あらら、これなら国を作れるわね」

療「・・・改めて主よ私は主の影になります」

乱「・・・すごすぎですう」

俺達はこの後一旦村に戻り大型の馬車を借りて宝を積み込んだのであった。

それにしても3台でやっと収まるとは思わなかった。

財宝、没落した古の王家（後書き）

第8問、義勇軍が滞在している町の名はなんだ？

1   ？ 陵

2   南陽

3   巴

4   平原

ヒント、まだ恋姫キャラは出ないよ・・・わかったかな？

滞在、？陵の町（前書き）

8問目の答えは・・・1番？陵でした

一言・・・まだまだ恋姫キャラは出ません、お許しください。



## 滞在、？陵の町

く村く

俺たちが村に戻る時には母さんは死んでいた。

医者によると、俺達が出た直ぐに息絶えたという事だ。

俺は悲しかったでも決意を持っていた為泣く事はなかった。

あれから4日経っていた。

俺達2人は墓地に来ている。

陸「母さん、親父、俺必ず治安の良い平和な国を作るよ、だから天でゆつくりと見ていてくれ」＊管理者を見たため、神や天国などを信じるようになった

燐「伯父様、伯母様、安心して下さい私が兄さんを支えます」

俺達は2人の墓の前で祈った。

燎「おい、陸、燐出発の準備が出来たぞ」

陸「ああ、今行く」

陸「行くぞ、燐」

俺は燐の手を持ち、燎いる方へ向かった。

燐「はっはい、兄さん／＼」

燐は顔を染めながら向かった。

汪牙は村長に財宝の一部を渡していた。

汪牙「出立の前に挨拶できたか？」

陸「ああ、済ませてきた」

汪牙「こつちもお前に言われた通り村長に村の復旧のために財宝の一部を渡したぞ」

陸「そうか」

陸「ところで乱と美鈴は？」

汪牙「先生は手紙を出しに伝書鳩の所に、乱は馬車の中でお前用の矢を作っている」

陸「そうか、先生が戻ったら出立でいいな」

汪牙「ああ、そうだな」

・・・10分後

美鈴「ごめん、お待たせ」

美鈴は急いで走ってきた。

陸「大丈夫ですよ」

陸「それじゃあ、全員揃ったし出立するか」

汪牙「そうだな、美琴、先頭は頼んだぞ」

美琴「分かってるわよ、そんなこと」

陸「燐は右、燎は左を頼む、俺は後ろに付く」

2人『はい（おう）』

そして俺達は故郷を旅立った。

おばちゃん「何時でもいいから帰ってきてなさいよ、貴方の故郷だから」

老人「達者でな、道を間違えるでないぞ」

子供「今度帰ってきたら、旅の武勇伝聞かせてよ」

ほぼ全員の村人達が俺達を見送っていた。

・・・

汪牙「ところで俺達はどこへ向かえばいいんだ？」

陸「ここから近いのは益州か荊州だなどちらかに行けばいいだろ」

燎「俺は荊州だな」

乱「私は益州です」

美琴「荊州でいいんじゃない？」

燐「兄さんの好きな方でいいです」

美鈴「どつちも微妙ね」

・  
・  
・

陸「よしじゃあ益州に行くか」

6人『了解』

俺達は益州に向けて馬を走らせた。

・  
・  
・

そして一週間後

く益州　？陵郡く

俺達は？陵の町に滞在している・・・理由は荊州の賊が益州にも範囲を広げているからであった。

今の所、『雷神』の総戦力は2000人程度、そのため7人で賊の相手をしている。

町の人からは雷の貴公子と2つ名で呼ばれ始めている。

そんなある日の夜・・・

7人で会議が行なわれていた。

賊の本拠地をどう攻略するかを決めていた。

汪牙「賊の総戦力は2万・・・さすがに2007人じゃきつい」

・・・いい事思いついた・・・だがうまくいくだろうか？

陸「1つ案がある・・・だが相手が乗るかは分からないが」

美琴「案があるなら、とつとと言いなさいよ全く・・・」

陸「相手は確か半分以上元農民だったよな？」

汪牙「ああ、そうだ仕切っている奴ら以外は荊州の重税に耐え切れなくなつた農民達だ」

陸「それなら説得すればこちら側に付くんじゃないのか？」

汪牙「確かにありかもしれないが・・・」

陸「上の奴らを斬れば大丈夫だと思う・・・」

汪牙「そこまで奴らが信用するか？」

燎「わからんな・・・」

美鈴「でもやって見る価値はあるんじゃない？」

燎「確かにやって見る価値は有りそうだな」

燐「うまく行けばいいですけど」

陸「一か八かだが、俺は成功する事を信じる」

汪牙「分かったそれでいこう」

陸「出陣は3日後、解散」

解散の一声で皆は一礼し自分の部屋に戻っていった。

・  
・  
・

翌日、町外れ、

訓練場が無い為、町の外で訓練を行なっている。

陸「おう、汪牙調子はどうだ？」

汪牙「ああ、そこら辺の賊には負けなくらいにはなったな」

兵長「公秦様だ、皆気を引き締めろ」

兵『おー』

俺は一度兵達を集めた。

陸「皆聞いてくれ、2日後、賊との最終戦を行なう無論君達にも戦ってもらう正し君達は指揮官だけを狙え、けして兵を殺すなよ」

兵達『はっ』

陸「わかったら、戻って自らを鍛えろ」

兵達『了解』

兵達は訓練に戻っていった。

汪牙「歩兵が1000（槍、剣などごちゃ混ぜ）弓兵が500 騎兵が500ってどこか」

陸「もう少し兵が居てくれればな・・・」

汪牙「そうだな・・・」

俺は少し黙った後、場所を離れた。

・・・ところ変わって？陵の町内

おっちゃん「公秦様、肉まんどうですか？」

おばちゃん「公秦様、おはようございます」

子供「お兄ちゃん、遊んで〜」

母「こら、公秦様に失礼でしょ」

一言言つと俺の人氣は鰻上がりだ。

ほとんどの町人が俺の名を知っている。

そんなところに・・・

美鈴「主」

陸「美鈴か、どうだった？」

美鈴「借りれた兵は5000人でした」

陸「おっ思つたより多く借りれたな」

美鈴「はい、これなら主の案うまくいくかもしれません」

陸「それならよかった、よし2日後絶対に成功させるぞ！」

美鈴「はい！」

よしこれで戦力は7000になったこれならうまくいきそうだ。

その後俺は近くの森に入り、美琴と組み手をしたのだった。



## 滞在、？陵の町（後書き）

第9問・・・といきたいですが問題が無いので近々登場する新キャラの情報を教えます^^

玲封 海栄（涙）

元黄巾党、公秦の言葉に心を打たれ彼を守ると決意する、速さ、隠密行動、騎馬、実技に関してトップだったため親衛隊隊長に任命される、武器は西洋から伝わってきた西洋剣、レイピア、セイレントバーン、聖風消波、騎馬戦は騎士槍、レッドハーツ赤麗心を使う、義勇軍『雷神』親衛隊長、身長168cm、体重は・・・やめておこう、髪型はロングで佐天さん風もちろん髪飾り有り髪色は赤が混ざった茶、瞳の色は赤

得意な事

元々農民のため、農作業、家事、掃除が得意

嫌いな事、者

辛い物と公秦に纏わりつく女　つまり、于吉、太史慈、公和の事

必殺技

連放一突

レイピアで連突して最後の一突で吹き飛ばす技

## 初陣、黄巾達の苦勞（前書き）

・・・まさかの10万アクセス突破w駄文、駄作ですがこれからも頑張りますので応援よろしくお願いしますm（| |）m

公秦の好きな恋姫キャラランキング（真あり）！

1位・・・恋！

2位・・・蓮華&霞！

3位・・・月&明命&雪蓮&美以&桃香&愛紗！

4位・・・亞沙&翠&白蓮&張三姉妹！

5位・・・桔梗&紫苑&星！

続いて公秦の好きな勢力！

1位・・・董卓軍！

2位・・・呉軍！

3位・・・蜀&黄巾&南蛮軍！

4位・・・公孫賛軍！

5  
位・  
魏軍

## 初陣、黄巾達の苦勞

決戦の日

陸「準備はできたか？」

汪牙「ああ、大体終わった」

乱「こつちも終わりました」

美琴「何時でも行けるわ」

燐「終わりました」

燎「すでに済んでいる」

美鈴「大丈夫よ」

陸「よし準備が出来たな、全軍出陣！」

兵達『オー！』

俺達義勇軍は賊の本拠地に向けて出陣した。

・・・

〈草原〉

俺達はなるべく賊にばれないよう天幕を張った。

燎「敵の根城はここから2里離れた所だ左右には森があり伏兵を置くのは有利だろう」

陸「わかった」

汪牙「作戦を言うぞ、まず、俺、美琴、先生が賊を挑発し、砦から誘い出す、陸、燎、乱、燐は軍を半分に分けて左右の森に待機、大体の賊が砦から出たら、森に待機していた両軍が敵の背後を突く、おまけに燎部隊が砦を占拠、賊頭を討ち取ったら、陸が説得、まあ、最後はうまくいくとは分かんが作戦は以上だ」

陸「いいな、それで行く」

6人『了解』

俺は天幕を出て日本刀を鞘から出し天に向かってかざして言った。

陸「皆初陣で緊張してるのは分かるだが敵は手加減などしない自分の命、家族の命、そして？ 陵の民の命を守りたければ全力を出し切って戦え、そして我々の旗を敵の砦に掲げようじゃないか！」

兵達『オー！』

兵達の士気が一気に高まった。

兵「やってやる俺達を守るんだ！」

兵「そうだ、俺達なら勝てる！」

兵「？陵・・・いや公秦様のために！」

兵達『勝つ！』

陸「全軍、進軍！」

兵達『オー！』

俺達は進軍していった途中の叵の3人と別れ俺達は森で息を潜めた。

（叵部隊 s i d o）

・・・

汪牙「そろそろだな」

美琴「ギタンギタンにしてやる！」

美鈴「早く行きましょ、ふふふ」

3人は賊の根城まで来た。

門番「貴様ら何者だ！」

汪牙「俺か？俺らはお前らを倒しに来た義勇軍だ」

門番「はっ？3人で勝てると思ってるのか？」

汪牙「馬鹿か、お前？勝てると思うから今いるんだろうが」

門番「なめやがつて3人ごとき俺1人で倒してやる」

汪牙「そうかなら掛かって来い」

門番は槍を突いてきたが汪牙はかるがるとかわしていった。

門番「当たらん、くそ」

汪牙「そろそろ、倒していいか？」

門番「やれるもんな『終わりだ、シュツザン』ギャアアア」

門番の断末魔と同時に矢が放たれたが軽々とかわしていった。

汪牙「よく聞け賊ども俺達は義勇軍『雷神』の3将軍だ貴様らなど俺達3人で十分だ掛かって来いザコどもが！」

その言葉に反応して砦の門が開けられた。

指揮官「3人など蹴散らせ！」

黄巾党「オー」

汪牙「1000人程度か、指揮官以外はなるべく殺すなよ」

美琴「わかってるわそんなこと」

美鈴「大丈夫よ」

汪牙「行くぞ！」

美琴「甲炎爆風！」

汪牙「狼牙鋼空斬！」

美鈴「月蝶の舞」(まるで踊っているかのように鞭を振るい、それに魅了されている敵を気づかない内に体中切り刻む技、特に敵が男だと効果は倍増する)

手加減したので500人程度しか吹き飛ばせられなかった。

だが効果は大きかった、どんどん敵が砦から出てきた。

汪牙「そろそろ後退するぞ！」

美琴「はいはいわかったわよ」

美鈴「あら、もう少しお相手したかったのに・・・」

俺達は賊を全員砦から出す為後退した、それにまんまと引つかかった賊達は追いかけてきた。

指揮官「敵が後退したぞ、今こそ好機、突撃！」

・・・面白いように引つかかってくる、そろそろだな。

俺は弓を取り鎗矢を放った。

ヒューーーーーー



汪牙「後は頼んだぞ、陸」

（囃部隊 s i d o o u t）

一方その頃・・・

ヒューーーー

陸「合図だ、全軍突撃！」

兵達『オー！』

左右の森に潜んでいた主力部隊は鎬矢の合図と同時に敵の後方を突いた。

賊頭「なっ伏兵だと！」

陸「指揮官のみを狙え！」

兵達『オー！』

陸「燎隊は砦を占拠せよ」

燎「はっ」

燎隊は砦占拠に向かった。

賊頭「数は勝っている押し込め！」

陸「貴様が頭か・・・その命もらう！」

俺は指示を出している賊頭の方に向かった。

賊頭「なっ・・・」

ズシャツ・・・バタツ

陸「貴様らの頭はこの公秦が討ち取った！」

その言葉を聴いて一気に黄巾党達の士気が下がった。

指揮官「くっ 一点集中突破で砦にもどれ！」

その声を上げた瞬間、砦に“嘉”の旗が掲げられた。

黄巾党の士気はどん底に落とされた。

ふと見ると女がいた多分黄巾党の1人だろう・・・

俺は彼女に近づき言った。

陸「お前達に善人に戻る機会を与えてやる」

陸「俺達の軍へ入れ、入れば過去の罪を許し、善人に戻してやる・・・  
・正しそれを与えるのは元農民だけだ、賊は捕縛する、全員武器を  
捨てよ！」

黄巾党達は次々と武器を捨てていった。

＼黄巾党 s i d o 〵

私は賊頭の近くにいた勿論頭が殺された時もはつきり見ていた。

頭を殺した奴がこちらに近づいてきた、私は殺されると思ったけど実際は違かった。

陸「俺達の軍へ入れ、入れば過去の罪を許し、善人に戻してやる」

その一言は私達にとっては天の救いだった。

確かに私達は故郷を捨て賊どもと一緒にになったけどそれは荊州の重税がひどかったせいだもし昔のまんまだったら私達は故郷で畑仕事をしていた絶対に、今で戻りたいと思うときもあった。

そう彼の一言は私達を救ったのだ

黄巾党（女）「なんで賊なのに救おうとするの？」

陸「お前達は荊州の重税に耐え切れなくなった者達だろ、だから元に戻る機会を与えてやるんだ」

その言葉に私達は武器を落とした。

＼黄巾党 s i d o o u t 〵

黄巾党達は武器を下ろしていった。

だが賊達はまだ戦いたいようだ。

陸「残るは賊のみ殲滅せよ！」

兵達『オー！』

残った賊達は捕縛に成功、俺達義勇軍の初勝利に終わった。

そして・・・

陸「戦いは終わった皆帰るぞ！」

そう言い俺達は新たに加わった1万8千の兵達と共に？陵の町に帰っていた。

初陣、黄巾達の苦勞（後書き）

第9問次回で農業班の人がかぶってる帽子の色はなんだ？

1 青

2 赤

3 紫

4 緑

わかるかな？・・・適当なクイズですいません；；

## 訓練、初日の鍛錬（前書き）

9 問目の答えは・・・2 番の赤でした^^

本編をどうぞ^^

感想ありがとうございます^^ 駄作ですが頑張ります^^

## 訓練、初日の鍛錬

帰還した俺達は？陵の民達に勝利を伝えた。

民達は歓声を上げたり涙を流している人達もいた。

俺は町の中心に行き黄巾党達の事を話した。

陸「この者達は一度は外道に落ちた・・・だがそれはこの時代のせいだ、そのため俺はこの者達にもう一度善人に戻る機会を与えたい、だから差別をしないで暖かく迎えてやってくれ頼む」

俺は一礼した・・・

最初は沈黙していたが段々声が上がってきた。

男性「俺は公秦様を信じる」

女性「私だって」

老人「何という心の持ち主じゃ、わしは感動しましたぞ」

・・・

批判の声は1つも無かった、俺は正直嬉しかった。

その後俺達は町の外の天幕に戻った。

俺は元黄巾党達を集めて、俺の意思を伝えた。

陸「俺はこの国を昔のように争いの無く復讐も無い平和な国に戻したい、だから俺に力を貸してくれ・・・もしどうしても戦いたくなかったら言ってくれ俺が？陵の民に言って農民に戻してやるから」  
・・・

沈黙の後元黄巾党達は次々と言い出した。

少女「私は公秦様の盾となります」

男「私も公秦様の力になりたいです」

男2「自分は農民に戻りません！」

女「女の私でも良いなら公秦様に力を貸します」

青年「俺は公秦様に近づける様に頑張ります」

全員が俺達の兵になることを志願した。

陸「わかった・・・だが農作業はしてもらう1日ずつ交代で5000ずつ畑仕事をしてもらうそれは2000の兵達も同じだから心配するな。」

新米兵達「分かりました」

陸「後、基本訓練が終わったら適正訓練をする、その事によって、歩兵（色々）弓兵、騎兵、隠密兵（暗殺兵、工作兵）に分かれてもらうこの事をしっかり焼き付けておく事」



新米兵達『了解です』

陸「今日はこれで解散、用意してある天幕で寝てくれ」

新米兵達『はっ』

新米兵達が出た後、俺は町の大工を呼んだ。

陸「頼みがある」

大工「わかってやす、兵舎ですな」

陸「20000人が入る兵舎を作ってくれ、複数で分けても構わんからなるべく早めにな」

大工「了解しやした」

陸「後、この前頼んだ物できたか？」

大工「明日の朝にはできやす、ですが職人でもないあつしで良いんですか？」

陸「木剣、木槍は折れなければ多少変でも構わん、木弓は最後延礼が見てくれるから大丈夫だ」

大工「・・・わかりやした、総出で1月で終わらせやす」

陸「すまない、親方」

大工「気になさんな、ちゃんと御代は貰いやすから」

陸「はははっ頼んだぞ」

大工「それでは失礼しやす」

大工の親方は帰っていた、・・・あの親方良いな、俺の目に狂いは無かったな。

そして俺は疲れたので一足早く寝付いた。

翌日・・・時刻9時

新米兵達は200列で並んでいる

陸「皆集まってるな、まず4班に分ける、200列から4列になれ」

新米兵達『了解』

まあ、数も数だから多少時間が掛かった。

陸「色の違う帽子を被ってもらう、左から1列目は赤、2列目は青、3列目は緑、4列目は、白の帽子を被ってもらう、今日は赤が農作業してくれ、それ以外は合同で体力づくりをする」

陸「農作業は李駿、于吉が見て、体力づくりは俺、公和、嘉威、太史慈、延礼が見る」

新米兵達『はっはい!』

人が多い為帽子を渡すのに時間が掛かった。

陸「よし、各自移動」

赤帽の新米兵達は李駿に連れられ畑へ向かった。

「体力づくり班 s i d o」

陸「よし、じゃあ手始めに町の周りを1周!」

陸「別に全力疾走しろというわけではない、自分の調子で行っていい、但し歩くと罰金だこれを覚えて置けよ」

新米兵達『了解!』

新米兵達は走っていった。

...

陸「よし、全員帰ってきたな、次は腕立て2時間の間できるだけ多くやってもらう」

陸「着いて来れない奴は最低でも100回はしてもらう」

陸「着いてこれる奴はどんどん行くぞ!」

新米兵達『了解!』

陸「では・・・始め!」

俺が手を上げた瞬間一斉に腕立てを始めた。

中々、見込みがあるな。

2時間後・・・

兵1「はあはあ」

兵2「ふ〜」

女性兵1「・・・きつい」

・・・

何とか全員100回以上を終えたようだ。

陸「よし、1時間休憩だ、飯食べて来い」

新米兵達『はっはい』

その言葉を聞いて新米兵達のさっきまで疲れていた顔が少し和らいだ。

そして1時間後・・・

陸「・・・次は武器鍛錬だ!」

俺達は大工の親方に頼んで作ってもらった木剣、木槍、木弓を持ってきた。

陸「好きなものを選べ別に今職業が決まるわけではないから自分の不

得意な物でも構わない」

そう言うと一緒に武器を持って行った。

陸「ここから3つに分かれる、まず剣兵は俺と嘉威が見る、槍兵は公和と太史慈に見てもらえ、弓兵は延礼が見てもらえ、以上」

言われた通り新米兵達は各自武器の鍛錬をしたのだった。

「体力づくり s i d o o u t」

「農作業 s i d o」

李駿「元々農民だったから耕す事は出来るだろ？」

新米兵「できます！」

李駿「なら、始めるか」

数が数のため結構広い畑が出来た。

李駿「おっもう昼か、よしここで1時間休憩だ、飯食べて来い」

新米兵達「はい、いってきます」

1時間後・・・

李駿「よし、次は種まきだ」

新米兵達「はっはい」

種まきもスムーズに終わった。

李駿「やはり、この数だと速いな」

李駿「おっもうこんな時間か、よし作業止め、最初の場所に戻るぞ」

新米兵達『はっはい』

〔農作業 s i d o o u t〕

〔朝の集合場所〕

陸「全員集まったな、今から休日についての事を教える」

陸「4日間の後の次の日が休日だつまり4日間訓練の後1日休日を繰り返すってことだ、休日は？ 陵の町で食事や買い物してもよし、身体を休めるため休むもよし、自分を鍛えるため自主練をしてもよし、つまり自由だ何しても構わない、但し悪事は別だぞ」

俺は袋を出した。

陸「今から支給金を渡す、その金で休暇を過ごせ」

その言葉言った後、直ぐに列が出来た。

金を渡すだけなのに結構時間が掛かった、さすが2万の数だ。

陸「そろそろ晩飯だ、解散」

新米兵達は食堂へ急いだ。

まあこんな事が1ヶ月行われていた、もちろん日に日に訓練はきつくなっていたそれでも兵達は着いてこれていた、途中農地が余りにも広くなったので農業班が激減した、休暇も何事も無く過ごせた事はよかった。

## 訓練、初日の鍛錬（後書き）

第10問、次回出てくる玲封が所属になる隊はどれだ？

1 歩兵隊

2 騎馬隊

3 隠密隊

4 親衛隊

さてわかるかな？、次の次から黄巾党討伐が始まります^^



## 試験、少女の夢（前書き）

10 門目の答えは・・・4 番親衛隊でした。

雑談ですが昨日、織田 信奈の野望5を買いました・・・ネタバレですが一番印象が良かったのがやはり良晴と信奈のキスシーンでした・・・自分もみかげ先生の用にいい文を書きたいと思いますが・・・今が限界です・・・でも少しずつ近づいていきたいと頑張ります・・・それでは本文をどうぞ^^

## 試験、少女の夢

私の名は玲封、字は海栄、公秦様の下について一ヶ月が経ちました、私は私を救ってくれた公秦様のため死ぬ気で修行を励みました、そう夢を果たすために・・・

試験当日

李駿「次12794番！」

玲封「はい！」

李駿「まずは速さの試験だ、町を一周し戻って来い」

玲封「はい！」

李駿「始め！」

合図と同時に風に乗ったのかのようにすばやく走った・・・

6分後

私は全力で走った、正直途中倒れかけたけど夢のため頑張った。

李駿「6分13秒・・・合格」

ちなみにこれまでの1位は男性6分47秒、女性6分45秒・・・つまり桁違いに彼女が速かった事だ。

嘉威「次は隠密試験だ、兵に捕まらない様に巻物を取りに行け」

玲封「はい！」

嘉威「始め！」

私は気配を消して進んでいった、途中見破られかけたが何とか巻物を取る事に成功した。

玲封「はあはあ、取ってきました」

私は疲れた顔で巻物を嘉威様に渡した。

嘉威「ほう、5分丁度か中々だな合格」

太史慈「次は実技よ、私と勝負しなさい！」

玲封「えっ？」

なぜ私が太史慈様のお相手を？私は少し戸惑った。

玲封「・・・なぜですか？」

太史慈「前の2人からの推薦よ」

玲封「わっわかりました！」

私はレイピアを構えた・・・さすが太史慈様隙がない・・・

太史慈「それにしても貴女の持っている剣こころへんじゃ見かけな

いわね」

私は警戒しながら返した

玲封「この剣は遠く西洋からの物と聞いております」

太史慈「へーそうなんだ、じゃあなたの腕見せてもらっわ」

そう言い太史慈様は突っ込んできた。

そして私はすかさず避ける、私の武器はレイピア、あれ（碇槍）を受け止めるはほぼ不可能なら一撃で決めるしかない！

避けると同時に技を出した。

玲封「連放一突！」

レイピアで連突を繰り返した。

太史慈「速いわね、速さだけなら公秦に並ぶわ、でも速いだけじゃ私を倒せない！」

太史慈「甲炎爆風！」

繰り出される爆風を何とか避けて最後の一突を放った。

がその一突当たらなかった。私の喉元に槍が突きつけられていたからだ。

太史慈「勝負有りね、中々いい勝負だったわよ」と自分を磨きな

さい！」

玲封「はい！」

太史慈「次は騎馬の試験よ、がんばりなさい」

玲封「はい！」

公和「騎馬での競技は三つ、一つ騎乗しながら弓矢で案山子を撃つ、二つ同じ試験者との対決、三つ私と勝負以上よ、12794番・・・いや玲封貴女の実力見せてもらっわ」

一つ目は軽々とほぼ真ん中に射落とした、まあこれくらいは訓練すれば出来る。

二つ目は13632番（黒苑）と対戦した。

黒苑「俺の名は黒苑、いざ参る！」

玲封「我が名は玲封、掛かってきなさい！」

私は騎士<sup>ランス</sup>槍を構えた。

相手は普通の槍のようだった。

公和「始め！」

黒苑「女が相手とはついてるな、行かせてもらっ！」

そっ言い黒苑は槍を振り回し突っ込んできた。

私はそのまま待ち構えた。

玲封「来なさい！」

黒苑は槍を振りかざした私はランスで弾き返した。

黒苑「女の割りにはやるな！」

玲封「まだまだ！」

ガツカンガンガシュツカツ

激しい交戦の中ふと黒苑が隙を見せた瞬間、私は黒苑の武器を弾き飛ばした。

黒苑「・・・まさか女に負けるとは・・・降参だ」

公和「勝者、玲封！」

玲封「勝った・・・」

模擬戦だというのに全身傷だらけだった事を見ると2人の戦いはすざましい戦いだったと見られる。

公和「今日はここまでゆっくり休んで明日私に挑みなさい」

玲封「はっはい」

私は即行自分の部屋に向かった、実は言ってもう疲れて倒れそうだ

ったからである。

翌日・・・

公和「おはよう、さあ行くわよ」

玲封「お願いします！」

私は馬に飛び乗りランスを構えた。

公和「それも西洋の物？」

そう言いながら公和はゆつくりと馬に乗り偃月刀を構えた。

玲封「はい！」

公和「赤く染まって真ん中には十字が刻まれてて綺麗ね」

玲封「はい、私も一目見て惚れました」

公和は少し顔の表情変えた。

公和「でも武器は綺麗が大事ではないわ、効率よく敵を倒すかよ」

玲封「わかっています。お飾りではありませんこのランスは！」

公和「それなら貴女の実力と武器の性能を見せてもらっわ」

公和「我が名は公和、義勇軍雷神の將軍なり、尋常に勝負せよ！」

玲封「我が名は玲封、その勝負受けてたちます！」

言葉と同時に2人は一斉に馬を走らせた。

ガンキンゴキンガンキン・・・

玲封は偃月刀の攻撃をランスで弾きながら好機を狙っていた・・・  
そして公和は目にも止まらぬ速さで斬撃を繰り返していた、他人から見ると明らかに玲封が押されているように見えた。

だが実際は違かった、玲封も隙を見せた瞬間攻撃していたが偃月刀で防御されていた。そんなことが10分間続いていたが・・・

???「その勝負、引き分けと見なす」

突然判定が下され引き分けで終わってしまった。

公和「兄さんまだ勝負が終わってません！」

そう私達の勝負を止めたのは公秦様でした。

公秦「憐！あくまで試験だこれ以上やり続けるとどちらか死ぬぞ！」

その言葉に2人の手は止まった。

公和「死ぬ？大げさな事言わないでください！」

公秦「ではお前の身体をよく見る！」

私は体を見た、そこには無数の切り傷があり血が止まることなく流



れていた。

そして・・・公和様もあちらこちらに傷があった、さらにもう少しで致命傷にもなりそうな傷さえもあった。

公和「・・・わかりました」

公秦「分かればいい、手当てした後俺の所に来い結果を発表する」

手当てを終えた後、急いで公秦様の所へ向かった。

公秦「玲封 海栄お前の所属を発表する」

玲封「はい！」

公秦「玲封、今日から君は親衛隊隊長だ、しっかり俺達を守ってくれよ」

玲封「えっはっはい！」

私は嬉しかった何故って？親衛隊配属の条件は全ての科目が最高な者のみしか配属されないからだ。それに夢に近づけた事が何よりも嬉しかった。

こうして私玲封は親衛隊隊長に任命されたのだった。

## 試験、少女の夢（後書き）

第11問、公秦に一目ぼれする娘は誰だ？

1 関羽

2 黄蓋

3 夏侯惇

4 劉備

さて誰でしょう？次回からは黄巾党編です^^

**軍儀、黄巾党殲滅作戦（前書き）**

11 問目の答えは・・・4 番劉備でした。

本文をどうぞ^^

## 軍儀、黄巾党殲滅作戦

初陣から2ヶ月がたった。兵舎も無事に完成しおまけに訓練場まで作ってもらえた。あのオヤジに頼んで正解だったな。それから志願兵が増え今では3万の軍になっていた。

数日前朝廷から一通の手紙が届いた・・・実は？陵の太守に渡された物だが太守は自分より相応しい人がいると言い俺に手紙を渡したの物だ・・・。

公秦「やつと張角達と対面か・・・」

公和「・・・？何か言いましたか？」

公秦「あついや何でもない」

俺は少し驚いた、地獄耳か公和の耳は？

李駿「そろそろ見えてくるぞ」

公秦「わかった」

言われたとおり5分もしないで様々な旗が掲げられた殲滅軍の駐屯地が見えてきた。

公秦「・・・許昌の曹操に、江東の孫策、西涼の馬騰（马超）、幽州の公孫賛、平原の劉備、冀州の袁紹、それに袁紹の従妹の袁術・・・ほぼ恋姫キャラ集まってるな・・・」

公和「恋姫キャラ？なにそれ??？」

公秦「うっ何でもない」

これで確信した公和は地獄耳だという事を、てか俺は小声で言うてるのにこの軍勢の中でよく聞こえるな公和・・・

そう歩いていくと

警備兵「貴様ら何者だ！」

俺達は門番に呼び止められた。

公秦「は？よく見る牙門旗を」

牙門旗には煌びやかと雷の文字が掲げられていた。

警備兵は一気に真っ青になった。

警備兵「あつ貴方方が噂の義勇軍ですか？」

公秦「そうだ、通してもらうぞ」

警備兵「失礼しました！」

警備兵は敬礼し見送った。

公秦「俺は代表達を見てくる、後は頼んだ」

將軍達『御意』

～天幕内～

???「遅いわね何しているのかしら？」

???「時間は守らなかあかんで・・・」

???「遅いですね・・・」

???「まあまあまだちょっと過ぎただけよ」

突然伝令が入ってきた

伝令「申し上げます、？陵の太守様が推薦された例の義勇軍が到着しました。」

???「わかったわ下がりなさい」

伝令「はっ」

伝令が出た瞬間1人の男が入ってきた。

公秦「遅れてすまん、義勇軍雷神頭首、公秦 玄龍だよろしく頼む」

張遼「うちは朝廷軍の張遼 文遠や、よろしゅう頼む」

曹操「私は曹操 孟徳よ、早く座りなさい」

劉備「わっ私は劉備 玄德です公秦さんよろしく」

孫策「久しぶりね公秦、ちょっとかつこよくなっただわね」

曹操「貴方？孫策と知り合いなの？」

公秦「知り合いていうか・・・『命の恩人よ』 まあそうだな」

俺、孫策以外『！！』

曹操「まあいいわ、本題に入りましょう」

そう言い曹操は席に座っていった、俺もそれに見習い席に座った。

曹操「敵の根城は半里先の古城よ、左右には切り立った壁背後には崖があるわそのため正面しか大軍が置けないのが不便だわ」

公秦「・・・ちょっと待て視点を変えれば奴らに逃げ道は無い、兵糧攻めでいいんじゃないか？」

曹操「確かに兵糧攻めもいいけど時間が掛かるしこちらの食料にも限度があるわ」

痺れを切らしたのか突然でしゃばりお嬢様が話しに入ってきた

袁紹「おっほほそんな相手私の華麗な軍隊で殲滅してあげますわ」

一気に場が沈黙した・・・さすがお馬鹿の代表だな・・・

曹操「・・・まあそれでいいわ、前衛は袁紹、左翼は私、右翼は孫策、後は後方で待機でいいわね」

返事は無かったものの反対意見は無かったのでそれに決まった。

曹操「作戦結構は3日後の朝よ」

曹操以外『承知』

俺達は天幕から出て行った・・・が

雪蓮「陸」

雪蓮はいきなり抱きついてきた。

陸「おわっ何だ雪蓮か」

雪蓮「何よ久しぶりの再会なのにその顔は、ぶつぶつ」

陸「すまん長旅で疲れててな」

雪蓮「それなら仕方が無いわね、今日はゆっくり休みなさい」

陸「そうしてもらっ」

俺は自分の陣営に戻った。

陸「燎いるか？」

燎「なんでしよう主？」

陸「隠密隊を率いて敵の根城から兵を捕縛して来い」

燎「はっわかりました」



そう言うといつの間にか燎は消えていた。

陸「何時もながらすごいなあいつは」

そう言い俺は眠かったのでそのまま寝付いた。

〈曹操sido〉

曹操軍天幕

曹操「それにしてもあの義勇軍のあの頭首中々見込みあるわ」

荀?「!!」

荀?「華琳様、では一刀と比べるとどうですか?」

華琳「断然、公秦あのおとこよ桂花」

桂花「そうですか・・・」

桂花は少し顔を落とした。

華琳「安心しなさい、私が欲しいのはあの男の知性よ」

桂花の顔がパアツと明るくなった。

華琳（桂花嘘ついてごめんね、本当は“両方”興味があるわ）

〈曹操sido out〉

〱劉備sido〱

劉備軍天幕〱

関羽「桃香様〱どこですか？」

劉備が見当たらないので関羽は探していたのだった。

桃香「愛紗ちゃんどうしたの？」

ひょこつと突然現れたので関羽は少し驚いた。

愛紗「どうしたのではありません、どこに行っていたのですか？」

ちよつと怒り気味で桃香に言った。

桃香「ちよつと外の星を見てたの」

愛紗「なぜ星を？」

???「お主にはわからぬのか？」

愛紗「星突然話しに入ってくるな！」

星「やはり愛紗は初心よの」

愛紗「どういう意味だ？」

星「ここまで言ってわからぬのか愛紗よだからお主はその歳になっ

ても接吻さえもできない・・・『うるさい！私はまだそんな歳ではない！』接吻くらいはもう終えてもいい頃では無いのか？」

愛紗は黙ってしまった・・・

星「つまり桃香様は恋をしたのだ」

関羽「なっ！」

星「とうとう桃香様にも春が来たのだよ」

愛紗「相手は誰ですか桃香様？」

振り向いたら桃香様は真っ赤な顔で倒れていた。

愛紗「桃香様！」

愛紗は急いで桃香を持ち上げた。

星「相手はおそらく遅れてきた義勇軍の頭首だな」

関羽「近頃噂されてるあの義勇軍か？」

星「おそらくな」

その後桃香様を寝室に運びこんだのだった。

愛紗（桃香様が惚れた男少し気になる・・・明日例の義勇軍に行つて見るか・・・）

そうして寝付いたのだった。

〽劉備sido out〽

〽孫策sido〽

雪蓮「んんん」

冥琳「やけに上機嫌だな雪蓮」

雪蓮「公秦に会ってきたのよ」

冥琳「おお、やはり噂の義勇軍は奴が率いていたのか」

雪蓮「それに私好みにかっこよくなって嬉しいのよ」

冥琳「そうか良かったな雪蓮」

黄蓋「その話儂にも聞かせてくれないか？」

雪蓮「そうねあの時祭はいなかったもんね、教えてあげる」

雪蓮は祭に公秦と出会った時のことを話した。

祭「そのれーるがんとは何じゃ？」

雪蓮「私にも多少しかわからないけど雷の力って言ってたわね」

祭「雷の力だと？聞いた事が無いな」

雪蓮「そういえばこう言ってたわね特別な能力って」

冥琳「氣を使つた能力じゃないのか？」

祭「少なくとも儂が知る中では氣を雷に変えるなどありえん事じゃ」

雪蓮「そうなると陸は何者なのかしら？氣になるわ」

冥琳（・・・また始まつたか雪蓮の癖が・・・）

冥琳（だが確かに氣になるな・・・間者でも出しとくか）

こうして密かに間者を公秦に送つた冥琳だった。

（孫策 s i d o o u t）

他の陣営の事も知らず安らかに俺は眠っていた。

## 軍儀、黄巾党殲滅作戦（後書き）

久しぶりの投稿です^^

やっぱり星と霞の言葉遣いが難しいです><

それでは第12問蜀の次に雷神を追う軍は何処でしょう？

1 魏軍

2 朝廷軍（張遼）

3 公孫賛軍

4 西涼軍（馬超）

わかったかな？次回をお楽しみに^^

休息、一時の安らぎ（前書き）

黄巾党殲滅作戦の間の出来事です。

## 休息、一時の安らぎ

翌朝

陸「んゝよく寝たな」

ふと見ると雀が鳴いていた

陸「大体7時頃か・・・やることも無いし鍛錬でもするか」

俺は刀を持ち外へ向かった。

陸「せい！やあ！はあー！」

あっという間に1時間が越えていた。

公秦「そろそろ終わるか・・・とその前にそこに隠れている奴姿を見せる」

2人『！！』

2人は驚いた表情で姿を現した

・・・関羽に周泰か面白い組み合わせだな

公秦「何が目的だ？偵察か、それとも暗殺か？」

関羽「ちっ違う私は噂の義勇軍を一目見たかったただけだ」



公秦「ならなぜ堂々と見ない？怪しまれても仕方が無いぞ」

関羽「すまなかった、以後気をつける」

公秦「でアンタは何処の間者だ？」

周泰「なぜ間者だと？」

公秦「俺も馬鹿じゃない服装を見ればわかる」

周泰「・・・言えません！」

・・・ちよつと引つかかせるか。

公秦「もしかして、雪蓮のどこか？」

周泰「なぜそれを！・・・あつ」

見事に引つかかった、訓練が甘い周泰

公秦「正体もバレたことだし、正直に話したらどうだ？」

公秦「何の目的で俺を探っていた？」

周泰「・・・貴方の秘密についてです」

公秦「そうか・・・雪蓮にこう伝えろ、時期がきたら直接話すと」

周泰「・・・わかりました」

俺は少し考えた・・・よし

公秦「朝飯食べてくか？」

関羽「別に腹など減って『ぐ』頂こう／＼／」

周泰「いいんですか？」

公秦「決まりだな、食堂へ行くか」

周泰「はい！」

関羽「・・・ああ」

途中釣り帰りの太史慈を捕まえた

公秦「よう、太史慈釣りはどうだった？」

太史慈「文句なしの大漁よ」

公秦「それはよかった」

太史慈「??」

公秦「俺達3人に取れたての魚食べさせてくれないか」

太史慈「いいけどこの子達誰？」

公秦「そうだったな、自己紹介がまだだった」

公秦「俺の名は公秦、字玄龍だ」

関羽「私は関羽、字は雲長だ」

周泰「私は周泰、字は幼平です」

太史慈「私は太史慈、子義よ」

公秦「つて事で頼む」

太史慈「……まあアンタが言う事だし作ってあげるわよ」

公秦「すまん、美琴」

美琴「いいわよ、陸」

美琴は厨房に入っていた。

陸「よし空いてるところ座っていいぞ」

周泰「おまかせします」

関羽「同じく」

陸「……じゃあ厨房に近いところにするか」

2人『はい（ああ）』

俺達が一番厨房に近いところに座った。

数分後

美琴「お待ちどうさま、単純に塩焼きよ」

陸「おつ鮎の塩焼きかうまそうだな」

周泰「おいしそうです」

関羽「いい匂いだ」

山ほどの鮎の塩焼きがおかれた。

美琴「さあ、どんどん食べてね」

3人『いただきます』

いただきますと同時に周泰達は食べた……よほど腹をすかせたんだな。

周泰「モグモグ」

……やばい可愛い、可愛い食べ方をするのは呂布だけかと思ったが周泰の食べ方のいいな、比べて関羽は……

関羽「ハムハム」

上品に食べるな、周泰は可愛いと思うが関羽は綺麗だと思うな（あくまで食べ方だぞ）

そう思い二人の食べ姿を見て……

ダッダッダッ

公和「兄さん、その女達は誰ですか!」

公和が飛び込んできた。

公秦「公和! 客人に失礼だぞ!」

俺は強く叱った、そりゃ行儀が悪いからな。

公和「すっすいませんでした」

事情を聞いて自分が早とちりしてしまったことに謝った

公秦「わかればいい」

公秦「劉備軍の関羽、孫策軍の周泰だ」

公和「私は義妹の公和です」

公和が加わり話をもっと弾んでいった。

食べ終わると2人は帰ろうとしたので俺は止めた。

公秦「もう少し見てかないか?」

2人「え?」

周泰「いいんですか?」

公秦「侘びのしるしだから、いいさ」

周泰「ならほかの武將たちが見たいです！」

関羽「私も気になるな、私もそれでいい」

公秦「よし決まりだ、公和行くぞ！」

公和「はっはい」

俺たちは食堂を出て、武將の元に向かった。

ガツキガンキン

李駿と嘉威が組み手をしていた。

公秦「よう、李駿、嘉威」

嘉威「どうされましたか主？」

李駿「後ろの2人見慣れない奴だが客人か？」

公秦「ご名答、そのとおりだ」

関羽「関羽と申します」

周泰「私は周泰です」

李駿「俺は李駿だ」

嘉威「嘉威だ」

その後俺達は2人の組み手を見学させてもらった。

そして2人は組み手を見た後礼を述べ自分の陣へ帰っていたのだった。

## 休息、一時の安らぎ（後書き）

外伝的な物です多少本編に関わってくるかもしれませんが。



## 決行、張三姉妹救出作戦（前書き）

前回の答えは2番朝廷軍でした。

ちなみにあくまでも書いているのは恋姫無双ですですので三国志と違うのは当たり前ですそれでも構わない方は進んでください^^

## 決行、張三姉妹救出作戦

翌日、燎は100人程度の捕虜を捕まえて帰ってきた。

燎「主およそ100人を捕縛してきました」

陸「さすが燎だな、ご苦労だった。」

燎「ありがたき幸せ」

俺は捕縛した黄巾党100人と面談した

黄巾党達は震えながら絶望した顔でこちらを見ていた。

黄巾党1「・・・俺達は殺されるのか？」

公秦「場合によってはな」

黄巾党2「・・・死にたくない」

黄巾党3「・・・死ぬ前にもう一度張角様に会いたい」

公秦「人の話を聞け！」

黄巾党達『ひいっ』

公秦「今の黄巾党の状況を教えろ」

少し沈黙した後黄巾党の1人が喋った。

黄巾党「俺達は元々はただの追っかけだったんだ」

公秦「ならなぜ反逆者になったんだ？」

黄巾党「・・・それは・・・すべてあの工口役人が悪いんだ」

公秦「どういうことだ？」

黄巾党「役人が権限で張角様達を襲おうとしたんだ」

公秦「なっ！」

どこまで腐ってんだ漢は・・・

黄巾党「俺達は何とか張角様達を助けたんだ」

黄巾党「役人は怒って重税にしたんだ、その後元に戻してほしければ張三姉妹を渡せて言っ来て来たんだ」

公秦「・・・」

黄巾党「俺達是对抗した・・・役人は軍を使って黙らせようとしたが俺達の方が上手で勝ったんだ、その後はお尋ね者になり今になったんだ」

公秦「・・・そうか、決めた」

公秦「お前達を全員生かしてやる」

黄巾党『!!!』

公秦「但し全員俺の軍に入ってもらうがそれでもいいか？」

黄巾党1「張角様達の安全を保障してくれるなら・・・な？」

黄巾党達『ああ・・・』

公秦「よし、決まりだな」

公秦「嘉威！」

嘉威「なんでしょう？」

公秦「女の死体を三つ集めて来い」

嘉威「人を殺せという事ですか？」

公秦「最悪な場合な、だがなるべく殺すのはやめてくれ」

嘉威「はっ仰せのままに」

公秦「頼んだぞ、お前に懸かっているからな」

嘉威「ハッ」

そう言つと嘉威はいなくなっていた。

公秦「後一つ聞きたい」

黄巾党「・・・？」

公秦「張三姉妹の顔はバレているか？」

黄巾党「バレていません、役人は倒しましたから」

公秦「そうか、なら安心だ」

公秦「じゃあ今から俺の軍の鎧を着ろ」

黄巾党「なぜです？」

公秦「偵察を出したように見せてお前達を逃がす、お前達は仲間を説得させ夜、門を開かせるその後俺達が入る、安心しろ俺の軍の半分は元農民だから悪さはしない」

黄巾党「わかりました」

その後、捕縛した奴らを偵察に出したように見せて逃がした。

1時間後、燎は死体を3つ持って帰ってきた。

陸「早かったな」

燎「病で亡くなった娘を貰って来ました」

陸「よくやった」

その夜

公秦「黄巾党に奇襲をかける、俺に続け！」

兵達『オー！』

俺達は根城に向かった

その頃・・・他の殲滅隊はというと・・・

魏軍

春蘭「華琳様たつ大変です！」

華琳「どうかしたの春蘭？」

春蘭「例の義勇軍が単独で敵に進軍中です！」

華琳「わかったは直ぐに出陣の仕度をしなさい」

春蘭「御意」

春蘭は天幕を去った

華琳「ふふふ、誰か出るとは考えていたけどまさかあの義勇軍とわね・・・ますます興味がわいたわ」

呉軍

伝令「孫策様、周瑜様大変です！」

孫策、周瑜「どうした（の）？」

伝令「義勇軍が動きました！」

周瑜「何！」

孫策「先を越されたわね・・・さすが公秦ね」

孫策「冥琳、私達も義勇軍に続くわよ！」

冥琳「わかっている」

孫策「全軍進撃！」

兵達『オー！』

蜀軍

星「愛紗大変だぞ」

愛紗「どうした星？」

星「義勇軍が動き出した、それに続いて呉軍、魏軍も追っている」

愛紗「なっ」

愛紗は少し考えた後言った

愛紗「桃香様、我々も動いたほうがよろしいのでわ？」

・・・と桃香に言ったが・・・

桃香「さすが公秦様・・・／＼」

・・・駄目だ桃香様が妄想モードに・・・

愛紗「朱里はどう思う？」

朱里「私は動いた方がよろしいかと・・・」

愛紗「桃香様、ご決断を」

桃香ははっと我に振り返った。

桃香「わっ 私たちも行かないと」

愛紗「御意」

愛紗「我々も追うぞ！」

兵達『オー！』

朝廷軍

兵長「張遼様！」

張遼「どうしたんや？」

兵長「義勇軍が単独で敵に進軍、続いて呉軍、魏軍、蜀軍も追っています」



張遼「なんやて！」

張遼「・・・しゃあない、うちらも行くで！」

兵長「はっ」

張遼「義勇軍を追うで！」

兵達『はっ！』

その他の諸侯も呉、魏、蜀、朝廷、に続いて動きだしたのだった。

敵根城前

公秦「全軍停止！」

その一言で全員の足が止まった。

公秦「これから言うこと聞いてくれ」

公秦「俺は秘密裏に黄巾党と交渉した、もう直ぐ門が開くが中の人  
は殺すな、俺達の仲間だ、この事覚えといてくれ」

兵達は少し悩んだ後頷いた

兵達『はっ』

その言葉と同時に門が開いた。

公秦「全軍、進め！」

兵達『オー!』

少し警戒されていたが普通に入れた。

俺は逃がした奴らに近寄った。

公秦「張角殿はどちらに？」

黄巾党「こちらです」

俺は馬を降り張角の所へ向かった。

そこには3人の美少女が立っていた。

ショートで紫色の髪をしたメガネ娘が話してきた

???「貴方が公秦殿？」

公秦「いかにも、俺が公秦玄龍だ」

???「私は末っ子の張梁といいます」

張梁「本当に私達を救ってくださるんですか？」

公秦「ああ、但し黄巾党の人達には俺の軍に入ってもらうがな」

???「ちは信じられないな」

横から水色の髪をしたサイドポニーテイルの貧乳娘が話しに入って

きた。

張梁「張宝姉さん！」

張宝「だってまだ会ったばかりの人を信じるなんて・・・」

張梁「確かにそうだけどこれしか私達全員が助かる方法が無いですよ」

「???」「私は信じる！」

そう言ったのが大きなリボンを着けて桃色の髪をした巨乳娘だった。

張梁「張角姉さんと同じです」

張角「だって嘘だったら今直ぐにでも殺せるでしょ・・・でも今の男に殺気は無いもん」

その言葉で張宝が納得したらしく交渉は成立した。

張角「私の真名は天和です」

張宝「ちは地和だよ」

張梁「私は人和」

公秦「俺は陸だよろしくな」

俺は笑顔で言った

その瞬間3姉妹は顔を染めた。

管理者「……ちいつ奴の笑顔は化け物か！」

ん？どこからか声が聞こえたんだが……

気のせいか……

その後砦に雷の旗を掲げた。

一方その頃4軍はというと……

呉軍

伝令「義勇軍が根城に侵入しました！」

周瑜「なっなんだと！」

孫策「どうやって入ったのかしら？」

伝令「それが……門が開いて中に入りました」

孫策「開いて？破つてじゃないの？」

伝令「いえ開いてです」

周瑜「……これで手柄は奴らに奪われたな……」

孫策「全軍、撤退よここにおいても意味無いわ」

その言葉を始めに呉軍は駐屯地に戻って行った。

魏軍

春蘭「華琳様、義勇軍が砦を占拠しました」

華琳「そう？それならここにいる必要は無いわね、全軍撤退」

春蘭「余り驚いた様子は無いんですが？」

華琳「義勇軍が動いた時点で負けは決定していたわ」

春蘭「なぜですか？」

華琳「幾ら？陵の雷と言えど3倍近い相手を単独で攻める事は出来ない、それなのに動いたつまり確実に自分達が勝つ方法があったのよ、だから今際いったって後の祭りよ」

春蘭「・・・そうですか・・・」

華琳（ますます興味がわいたわ・・・直接会いに行こうかしら？）

蜀軍

????「愛紗大変なのだ！」

愛紗「どうした鈴々？」

鈴々「義勇軍が砦の中に入ったのだ！」

愛紗「!!」

愛紗はそれを聞き急いで桃香に知らせた。

愛紗「桃香様、義勇軍が砦に侵攻したと情報が!」

桃香「えっ? 公秦様が?」

突然鈴々が割り込んできた。

鈴々「砦に雷の旗が掲げられたのだ!」

その場にいた全員『!!』

愛紗「本当か鈴々?」

鈴々「本当なのだ、ちゃんと雷って書いてあったのだ」

桃香「きゃっすーいさすが公秦様／＼」

愛紗「桃香様!」

その後桃香は愛紗にキツイ説教をされたのは言っまでも無い。

朝廷軍

兵長「張遼様!」

張遼「どうしたんや?」

兵長「義勇軍が砦を制圧しました」

張遼「んなアホな・・・」

兵長「確かに砦に雷の旗が掲げられています」

張遼「わかった、全軍撤退や駐屯地に戻るで」

兵長「はっ」

張遼（なんちゆう男や・・・まさか一時間しないで終わらすなんて）

張遼（明日の報告が楽しみや）

こうして黄巾党の乱は幕を閉じたのであった。

## 決行、張三姉妹救出作戦（後書き）

問題を修正します。

第13問次話劉備がお酒を飲んでしまいますさて誰から送られたお酒でしょうか？

1 張遼

2 孫策

3 太史慈

4 曹操

さてどれでしょうか？次回をお楽しみに！



報告、無傷で終えた一戦（前書き）

13問目の答えは2番孫策でした。  
反董卓まであと少しです^^

## 報告、無傷で終えた一戦

乱の翌日俺は張遼に報告に行った。

兵長「張遼様、公秦様がお見えに」

張遼「わかった通しや」

兵長「はっ」

公秦「張遼様、ご報告に参りました」

張遼「わかった言いてみ」

公秦「はっ」

公秦「我が軍が黄巾党を鎮圧、張三姉妹の首を持ってきました」

張遼「あゝ聞きたいのはそこちゃう」

張遼「何で1時間もしないでしかも無傷で鎮圧した理由を聞きたいんや」

公秦「・・・実はお・いや自分の部下の間者がへまをしまして黄巾党に捕まっただんです」

張遼「アンタは俺が似合ってるから戻してくれへんか？」

公秦「わかりました、その後部下と一緒に文が届いたんです、その文章には夜に門を開ける、単独で来てくれと書かれてましたそしてあの夜俺達は指示通り門の前に行くと言われ、俺達はいることが出来ました」

張遼「・・・敬語もやめてくへん？」

公秦「入った後は首謀者である張角殿と話した、内容は我らの命をやるからそれ以外の者を生かしてくれと言う内容だった。俺は感心した、自分の命を引き換えに仲間を助けてくれだなんて・・・俺は殺したくなかったでも殺すしかなかったんだ、涙を流しながら3人の首を斬った以上が内容だ」

公秦「約束だから残った黄巾党全てを俺の配下にしたい、それ以外は何も要らないから頼む」

俺は土下座をした、それを見た張遼は驚いたらしかった。

張遼「わかった・・・認めたる」

張遼「首確認させてもらってかまへんか？」

公秦「どうぞ」

俺は身代わりの首を差し出した。

張遼「・・・似てへんな」

公秦「彼女達は義姉妹だったようです」

張遼「せやな・・・それなら似てへんのもおかしくない」

張遼「わかったで・・・報告ありがとな、帰っていいで」

公秦「はっ失礼します」

・・・

張遼（あれは嘘やな、多分この首もちやう者やろ・・・まあええか、次会う時はたのしみにしてるで）

義勇軍陣営

汪牙「どうだった？」

陸「何とか騙せた」

汪牙「よかったな・・・これでもう安心だな」

陸「ああ・・・」

陸（本当にあれで騙せただろうか・・・）

その後天和達を呼んだ。

陸「君達の配属を教える」

彼女達はドキドキしていた。

陸「君達は応援隊をしてもらいたい」

3人「応援隊？」

陸「まあ簡単に言えば黄巾党になる前にしていた事するだ」

人和「つまり、歌芸人に戻れるの？」

陸「そうだ」

その言葉に3人は飛び跳ねた。

陸「但し、？陵のみでだかな」

陸「主に兵への安らぎだが月2、3度町で歌う事も考えている」

その言葉にもっと喜んだ3人だった。

こうして3人の配属が決まった。

その後俺は鍛錬をしにいった。

一方その頃蜀軍では・・・

愛紗は必死に桃香を押さえていた。

愛紗「星！貴様も桃香様を止めるのを手伝え！」

星「何いっぺおるかこれからが楽しくなるのに」

愛紗「・・・仕方が無い、鈴々手伝ってくれ！」

鈴々「桃香お姉ちゃんを行かせてあげればいいのだ」

桃香「行かせてよ、愛紗ちゃん」

愛紗「なりません、今の桃香様が行けば相手に迷惑がかかります」

桃香「大丈夫だよ、ただ見るだけだから」

愛紗「見るだけじゃおさまらなくなります、絶対に」

そんな事を何度も繰り返していたのだった・・・

・・・うるさい、隣为天幕からか・・・

「ギアアギアア」

「クチャクチャ」

「ドタドタ」

・・・プチッ、余りにもうるさすぎて堪忍袋の緒が切れた。えっ短気だなだと？なら例えてるなら間近で族のバイクの騒音が聞こえるのと一緒にぞ、耐えられるか？俺は無理だ・・・

陸「絶対に文句いつてやる！」

俺は俺の事で揉めているのも知らずイライラしながら隣为天幕に向かった。

公秦「失礼する」

蜀全員『!!!』

一斉にその場にいた女達がおれに注目したが俺はそんなことお構いなく言った。

公秦「隣の者だ・・・『公秦様』 なっ???」

いきなり劉備に抱きつかれた、わけがわからん・・・

公秦「いついきなりなにする／＼／」

さっきの抱きつきでイライラが吹き飛んだ

愛紗「すっすいません、桃香様!」

桃香「ふえゝウイクッ」

・・・酔っ払っているのか

愛紗「すいません、主が失礼な事を・・・」

公秦「いやいい、その様子だと酒に酔ってそうだが」

愛紗「そのとおりです、実は・・・」

愛紗「呉の孫策様がお酒を持ってきてくれたんです、しかもそのお酒は強く一杯飲んだだけで酔いそうになりました・・・それを桃香様が水と間違えて2杯飲んでしまつて今の状況に・・・」

公秦「・・・それはわかったが何故俺に抱きつく？」

蜀の武将達『!!』

愛紗（まさか理由がわからないのか？鈍感にもほどがある）

星（もっと面白くなりそうだ）

鈴々（鈴々でもわかるのだ）

朱里（男の人って鈍感なのかなあ？）

雛里（そうなのかなあ？）

少し沈黙が続いた・・・

そして愛紗が一言しゃべった。

愛紗「そんなこと自分で考えてください」

公秦「・・・ああ」

公秦もその言葉で少し理解したようだった。

公秦「俺は邪魔だな・・・帰るとするか」

そう言い歩こうとすると桃香が強く抱きついて俺を放さなかった。

公秦「・・・酔いが覚めるまで居るしかないな・・・」



愛紗「すいません」

愛紗は何度もペコペコと謝った。

公秦「気にするな」

趙雲が突然話してきた。

星「1つ質問よろしいか？」

公秦「ああ、構わない」

星「何故義勇軍など自ら作られたのか？」

公秦「・・・」

星「お主なら他の者の配下になれば優々と武将になれたものの」

公秦「確かに普通ならそうだ・・・だが俺は下につくのが嫌いなんだ、だから自らが指揮を執ってるんだ」

星「本当にそうか？」

公秦「・・・」

黙っていると今度は諸葛亮が話してきた。

朱里「・・・あの〜」

公秦「どうした？」

朱里「貴方方が救出した3人の少女、張姉妹ですよね？」

公秦「!!」

蜀の武将「!!」

朱里「その反応・・・やはりそうでしたか」

俺は驚くしかかった・・・さすがは少女になっても諸葛亮は諸葛亮だな・・・

公秦「・・・さすがは臥龍見破られたか・・・」

朱里「・・・もしよかったら真相を話してくれませんか？」

俺は悩んだ・・・嘘もついてもいいが見破られるのもオチなら素直に言うか・・・

公秦「・・・但し、誰にも言わないと約束してくれますか？」

朱里「もし破ると？」

公秦「検討はついていると思いますが破ったら我が軍全力で貴女方を潰さなければいけません」

その瞬間蜀の武将達はぞっとした。

朱里「わかりました。覚悟は来ています」

公秦「わかった・・・実は・・・」

話が終わると諸葛亮は納得した様子だった。

朱里「そうだったんですか・・・わかりました、秘密にしておきます」

公秦「ああ、頼む」

その後ようやく桃香が寝たので寝室に運んで俺は自分の陣営に帰っていった。

報告、無傷で終えた一戦（後書き）

1 4 問？ 陵の太守は元々何をしていた人でしょうか？

1 詩人

2 旅芸人

3 軍師

4 肉屋

さてどれでしょう？

## 出せ、新？陵太守（前書き）

14 問目の答えは1 番詩人でした、いよいよ義勇軍編は残す2 話です  
楽しみにしてください^^ 短いですが楽しんでください^^

## 出世、新？陵太守

『お帰りなさいませ、公秦様』

・・・は？今俺達は状況がつかめなかった。

話は少し前にさかのぼる・・・

俺達は12万の軍を率いてやっと？陵に戻ってきた。

公秦「久しぶりだなこの風景も」

公和「そうですね」

門が開くのを少し眺めていた。

門の開かれた先は見慣れた町並みがあった。

俺達はゆっくりと進んでいった

子供「あつ、公秦様だ！」

子供の一声でたくさんの人たちが集まってきた

女「おかえりなさい」

男「良くご無事で」

・・・

次々と声がかかってきた。

俺達は兵舎に向かおうとしたが・・・

使者「公秦様、宮殿へ」

太守様の使者が来たので宮殿に急いだ。

が・・・来てみるとやけに宮殿が静かだった。

使者「こちらへ」

使者の言われるほうに向かっていくと大広間に着いた。

だがそこには太守の姿は見られなかった。

そこで聞いたのがあの言葉だった。

全く状況がわからない所に1人の文官が声をかけてきた。

文官「公秦様これをどうぞ」

渡された物は手紙だった、俺は黙って手紙を読んだ。

公秦殿へ

主がこの文を見ている頃にはワシはいないだろう。

突然だがワシは太守の任を解いた、訳はワシが無能だったからじゃ実はワシは太守になるまでは名のある詩人だったのじゃ、詩人だった時たまたま先々代の皇帝と会ってのう彼に気に入られて太守の任を任されたのじゃ、無論詩人だったワシは政治など出来なかった。ワシは文官に任せつきりだった。・・ワシはそれではいかんと思つて色々努力した。・・じゃが無理だったそこでワシは息子達に託してみたのじゃ。・・だが失敗した、そんな時貴方方に会つたのじゃ、ワシにとって貴方方は救いの手だった、貴方方のお陰で町は発展していった、それにワシら達が無理だった賊退治さえも軽々と終わらしてしまつた。・・ワシは決心した、貴方方に太守を譲ろうと、そして貴方方が黄巾党退治に出掛けたの見計らつて朝廷に手紙を出し、息子達を強引に連れてこの地を去つたのじゃ、最後にここに残る者達は公秦殿に仕えたい者たちじゃどうか雇つてほしい。

無能な太守より

公秦「・・・」

俺は黙ってしまった

李駿「どうした？」

李駿は文を取つて皆に渡した。

公和「・・・えっ？」

太史慈「なによこれ・・・」



于吉「あらら・・・」

嘉威「・・・なるほど」

延礼「・・・」

つまり俺達は大出世したってことだ。

なぜ黙ったて？いきなり平から部長になったらどうなる？啞然してしまうだろそれが今の状況だ。

数分後我に返って俺は改めて太守の椅子に座った。

直後俺はまず治水工事を進め、夜間警備の強化を提案した。

文官達はそれに従い行動に移った。

そして將軍達には兵の強化、新兵の教育を命じ自らも新兵の教育に励んだ・・・

後大工たちに軍事研究所と兵舎の建築を要求した。

そんなこんなで一月がたった。

新兵たちも成長し強力な兵士になっていった。

治水工事を順調に進でいった。

大工たちに頼んだ兵舎は順調に進み、軍事研究所は完成した。

そんな中俺は軍事研究所で新技の研究をしていた

公秦「雷華雷翔陣！」

俺は鏃に電気を貯め矢を放った、案山子に射抜いた途端電撃が周囲に放たれた約直径10m範囲だろう・・・。

公秦「・・・技は完成しているだが・・・1人だけじゃ貧弱だ、か  
と言ってそのまま他の兵が矢に触ると感電死してしまう・・・くっ  
何かいい手はないか・・・」

俺は悩んでいたのだった・・・。

## 出世、新？陵太守（後書き）

第15問次の回とあるの衣装が出てきますさて最初に出てくる衣装はなんでしょう？

- 1 柵川中学の制服
- 2 常盤台中学の制服
- 3 上条さんの所の制服
- 4 堕天使エロメイド

さてどれでしょう、ちなみにこの衣装は全て出ますので^^

調達、必要不可欠な物（前書き）

答えは2番常盤台中学の制服でした^^、今回も短いですが楽しんでください。

## 調達、必要不可欠な物

一月たったある日俺は太守の仕事をフケて街探察に行っていた。

公秦「この前は南東行ったから、今回は南西に行ってみるか」

俺は南西に向かった。ちなみに今は変装中である。（バレたら宮殿に戻されるから）

？陵の町は意外と広い、まあ、洛陽、許昌に比べれば小さいがベスト10に入るほど広い街なのである。なので1日では回りきれない北東、北西、南東、南西に分けて探索している。南西エリアは主に職人達が集うエリアなのでそれなりに期待している。

公秦「思ったより色々店あるな」

鍛冶屋を始め裁縫屋、装飾屋、武器防具屋、家具屋、茶屋（ここでの茶屋はお茶専門で売っているお店のことである）骨董屋、呉服屋様々な店が建っていた。俺は1つずつ回っていたが中々欲しい物はなかった。

公秦「南西もだめか・・・次は洛陽でも行ってみるか・・・」

俺は諦めかけていると・・・何処からか男の声が聞こえた

男「どうした？そこの若者よ」

男は声を掛け近寄ってきた。

公秦「欲しい物が無くてな・・・」

男は不意に笑ったように見えた

男「この先の路地を曲がってみるといい」

ちよつと不安に思ったが行ってみようと思った

公秦「ありがとう、行ってみるよ」

俺は男の言われた通り先の路地を曲がっていった。

公秦「・・・なんか雰囲気が変わったな・・・」

その先は色々珍しい店が並んでいた。

公秦「・・・ここならあるかもな」

俺は1つの店に入った。

公秦「・・・こっこれは」

そこにあつた物ははすごかった。何故この世界にこんな物があるのかわからなかった。

公秦「とつ常盤台中学の制服・・・それに上条さんの高校の制服、墮天使メイド&墮天使エロメイド・・・なんでこんな所に禁書目録の衣装があるんだ???」

店長「お客さん目がいいですね・・・それは新作ですよ、ふふふ」

公秦「これはオリジナルか？」

店長「当然ですよ」

・・・買おう、常盤台の制服は太史慈で上条さんとは嘉威、墮天使系は于吉・・・いいな。

公秦「オヤジ、それとこれとあれを頼む」

店長「毎度あり」

その後違う店を覗いてみると・・・

公秦「今度は柵川中学（佐天さん＆初春の中学）の制服、一騎当千の南陽学院の制服・・・」

柵川中学の制服は延礼と玲封、南陽は李駿でいいな。

公秦「それを2つとあれを頼む」

店長「毎度ありがとう」

・・・おもわぬ買い物をしてしまったが後悔はしなかった。

公秦「よし後はあれをさがすか・・・」

そして俺は色々な店を回ったそしてやっと最後に目的の物を見つけた。

公秦「おっちゃん、この生地で手袋作れるかい？」

俺は今とある服を持っている。

店長「やってみなきゃ分からないな・・・」

公秦「頼む、作ってくれ金はいくらでも出す」

店長「・・・わかったで幾つ欲しいんだ？」

公秦「合わせて100作ってくれ」

店長「わかった、取り込もう」

公秦「ありがたい」

俺は上機嫌で宮殿へ帰った。

その後、李駿&玲封に説教された、まあ予想はしていたが。

1時間後、やっと説教から解放されてお土産を皆に渡した。

公秦「色々すまなかった、侘びのしるしに貰ってくれ」

各種さまざまなりアクションをした。

美琴「・・・なによこれ、アンタ私にこれ着させるき?」

美琴はものすごく怒りながら言った。



美鈴「・・・ふふふ、早速着てみようかしら」

美鈴は着替えるためその場を離れた

燎「ありがたき幸せ」

燎は無表情で礼を言った。

汪牙「・・・」

汪牙は黙ってしまった。

乱「なっなんですかこれ」

乱は顔を真っ赤になりながら言った。

涙「公秦様から貰えるなんて感激です！」

涙は嬉し涙を流しながら言った。

色々文句などあったものの全員共ちゃんと着てくれた。

女性陣の衣装はものすごく似合っていた、まるで本物に会っている感じだった特に太史慈は予想以上に綺麗だった。

ああ・・・デジカメがあったらな・・・美琴の姿撮れたのにな、と俺は少し残念に思ったのだった。

美琴「ちよつとアンタまた変なこと妄想してるでしょ？」

陸「いや・・・そんなことない！」

美琴「本当？」

陸「・・・」

美琴「・・・まっいいわ今回は許してあげるけど次変な物買ってきたらわかってるでしょうね？」

陸「はっはい！」

まあ多少あったが無事に全員の变身姿を見れたので買ったかいがあったと思う陸であった。

## 調達、必要不可欠な物（後書き）

次はいよいよ反董卓連合編です、反董卓連合編は戦うシーンを増やしたいと思います。応援よろしくお願いします m（――）m

**真偽、真実を知るために（前書き）**

反董卓連合編スタートです、楽しんでください^^

## 真偽、真実を知るために

あれを探し当てて1ヶ月たった。無事にあれの製作に成功し今はあれを使う専属部隊を育てている。

公秦「構え！・・・狙いを定め、撃て！」

掛け声と同時に複数の矢が放たれる。その複数の矢が案山子に当たると電撃が放たれた。そう雷華雷翔陣である、がなぜ一般兵が放てるのかは謎に包まれていた。

そうしていると嘉威が突然現れた。

嘉威「公秦様、隠密兵が到着しました」

公秦「おっ・・・わかった直ぐ向かう」

内心何処から来た？！と驚いた公秦だった。

俺はすぐさま大広間に向かった。

そこには親衛隊隊長、將軍達が既に集まっていた。

俺は隠密兵に状況を聞いた。

隠密兵「報告します、董卓の悪政の噂は定かではありませんが各諸候は動きを見せています」

公秦「そうか、わかった、下がっていいぞ」

隠密兵「はっ失礼します」

隠密兵が出た後俺達は言い合った。

李駿「公秦今が好機だ、董卓を討伐し我々の名声上げよう」

于吉「私も賛成です、主の夢のため董卓には糧になってもらいましよう」

太史慈「私は戦えれば十分よ」

公和「私は兄さんに従います」

嘉威「同じく」

延礼「私もです」

玲封「主に従います」

どうしたらいいものか・・・俺的には董卓を助けたいし、董卓はそのまま洛陽を守ってほしい、そうなると反董卓だと助けられても洛陽は魏の物になってしまうそれは断じて許せん、やはり董卓に加勢だな、噂は嘘だと思っからな。

公秦「すまん、少し考えさせてくれ」

將軍達は頷いた。

俺はその場を去り寝室で少々睡眠した。

深夜 俺は李駿、嘉威を呼んだ。

李駿「どうした？何か用か？」

嘉威「推参しました」

公秦「率直に言う、俺は董卓に加勢する」

2人『!!』

李駿「どっどっという事だ？」

公秦「言葉通りだ、後俺は今から洛陽へ向かう、真偽を確かめる事と、同盟を結ぶためにな」

李駿は少し黙った。

李駿「・・・じゃあ聞くがもし噂が本当だったらどうするんだ？」

公秦「その時は俺が斬る」

李駿「1人ですか？」

公秦「いや雷虎隊を連れて行く」

李駿は少し黙ったが何とか認めてくれた。

李駿「・・・たたくしょうがねえ行って来い」

公秦「後頼みたい事が2人にある」

李駿「なんだ？」

嘉威「なんでしょうか？」

公秦「1つ俺が留守の事は將軍以外話すな、2つ俺の留守の間嘉威俺に変装しといってくれ」

嘉威「はっ主が望むなら」

公秦「3つお前達は反董卓に付け、4つ雷虎隊は修行に出したと言  
つといってくれ」

李駿「・・・わかった」

嘉威「仰せのままに」

公秦「俺は出発の準備をする、お前達は門を開けといってくれ」

2人『御意』

俺は二人と別れ馬屋に向かったが・・・

突然玲封が飛び込んできた。

玲封「公秦様、私もお供させてください！」

公秦「・・・聞いていたのか？」



玲封「はい、最初からずっと聞いていました」

公秦「……わかった、但し命令は絶対だぞ」

玲封「わかっています！」

公秦「ならついて来い」

俺は玲封を連れ馬屋に向かった。

俺は前もって準備していた服に着替え馬に跨った。

公秦「門へ向かうぞ」

玲封「はっはい！」

門に到着すると雷虎隊全員がすでに集まっていた。

公秦「すまん、遅くなって」

雷虎隊隊長「いえ、我々も今来たところなので」

公秦「そうか……ならよかった、隊長、親衛隊隊長も同行する事になったよろしく頼む」

雷虎隊隊長「わかりました」

公秦「後嘉威、玲封の事も適当に言っといてくれ」

嘉威「わかりました、お氣をつけて」

公秦「行ってくる、では行くぞ！」

雷虎隊『オー！』

100騎ばかりの馬が一齐に目的地洛陽に向けて駆け出した。

2週間後、洛陽

俺達は2週間の旅を終え無事洛陽にたどり着いたのだった。

俺達は？陵の商人の護衛隊ということで街に入っている

予想通り街は活気で溢れており、噂は嘘であることを確認した。

玲封「ここまで違ふと疑っていた私達が恥ずかしいです・・・」

公秦「まあ氣にするな、気づかなかつた奴よりはよっぽど良いだろ」

玲封「確かにそうですね」

俺達がそう話していると・・・

警備兵「待つてー！」

強盗「ちっ・・・しめた」

強盗を警備兵が追いかけていた。

そして追い詰められた強盗はとある少女を人質に取つたのだった。

少女の連れらしき少女が叫んだ。

少女の連れの女性「月！」

その言葉を聞いて俺は吹きそうになった

公秦「ブツ・・・マジか・・・」

玲封「どうなさいましたか？」

公秦「いや何でもない」

（まさか董卓が人質に取られるとは・・・警戒心無さ過ぎだぞ・・・）

玲封「どうしますかあの男、警備兵は手を出させなそうですが・・・」

公秦「俺が片付けてくる」

玲封「分りました」

俺は俺自身に電磁加速を与え男の所に向かった

公秦「スリッドアップ走力向上」

その後は一瞬だった。

俺は男の背後に回り首に手刀した。

男はそのまま意識を失いその場に倒れた。

それを見た警備兵はすぐさま強盗を縄で拘束した。

俺は尻餅をついた少女に手を差し伸べ安否をきいた。

公秦「大丈夫か？」

董卓「へう大丈夫です／＼」

それを見ていた玲封は仏頂面になっていたが俺は気づかなかった。

周りからは拍手歓声が聞こえてきた。

町人「やるじゃねえかあんちゃん」

子供「お兄ちゃんかつこいい！」

婦人「うちの旦那もあんな風なつてほしいわ」

そう町人が話していると・・・連れであろう少女が駆けつけた。

董卓「あつ詠ちゃん」

賈馱「あつ詠ちゃんじゃないでしょ！まったくもう僕を心配させて  
！」

董卓「へうごめんなさい」

賈馱「本当にありがとうございます、貴方のお名前は？」

公秦「俺の名は延涼、そして連れの法鮮」

賈馱「僕は賈馱」

董卓「私は董卓です」

俺達は2人の案内で宮殿に呼ばれたのだった。

**真偽、真実を知るために（後書き）**

第16問 次回陸は董卓の將軍の一人と一騎打ちしますさて誰でしょう？

1 恋

2 華雄

3 霞

さて誰でしょう？、ヒント、陸と面識があります。

一戦、公秦VS張遼（前書き）

16問目の答えは3番 霞でした。

走力向上はとある科学の超電磁砲6話で子供バックを拾おうとした時の御坂さんが使った技と思ってください。

## 一戦、公秦VS張遼

俺達はそのまま洛陽の宮殿に呼ばれた、偽名の理由はどこかに潜んでいるであろう間者に気づかれないようにするためだ。

しばらく大広間で待っていると庶民の格好からいかにもお偉いさんと思わせる服装で現れた。

董卓「先ほどは本当にありがとうございました」

賈馱「僕からも本当に月を助けてくれてありがとうございます」

延涼「当然の事をしたまでですよ」

法鮮「延涼殿は困った人を見捨てれない性質の人ですからお気になさらず」

賈馱「それでも恩人です、僕達にお礼をさせてください」

延涼「お礼など要りません、その心遣いで満足です」

董卓「それでは気がすみません、お願いしますお礼をさせてください」

延涼「・・・それでは私達を雇ってくれませんか？」

2人「雇う？」

延涼「はい、私達は？陵の商人の護衛として雇われていました・・・



ですが当然商人殿がもう護衛は要らないから、去ってくれと言われていたのです、そう途方に暮れているときに貴女方に会ったのです」

董卓「そうですか・・・可愛そうにわかりました、私の下で働いてください」

2人「ありがとうございます」

俺達2人は董卓の客将として雇われる事になった。

そして董卓たちは俺達を將軍達に紹介するため全員呼んだのだった。

まあ、華雄、呂布、陳宮は初対面だから良いとして張遼には完璧にバレルな・・・

こりゃ素直に言ったほうが良いな。

そうしていると次々と將軍達が現れた不幸中の幸いなのか張遼が一番遅くに来たのは良かった。

張遼「あんたは・・・」

そう張遼が言いかけた時決心して自ら言った

公秦「1つ謝らないといけないことがある」

董卓&賈馮「??」

公秦「俺の本当の名は公秦だ」

その言葉に場が固まった。

董卓、賈馱は突然の事に動揺した。

張遼「なんであんたがおる？」

公秦「丁度強盗に襲われている董卓様に出くわしてなほつとけなかつたから助けたんだ」

張遼「違う！何でアンタが洛陽におるんやと聞いてるんや！」

張遼は顔を真っ赤にして迫ってきた。

張遼「もし暗殺とか言うならその場で斬るで！」

公秦「何勘違いしている？」

張遼「どういう意味や！」

公秦「俺はただ噂が本当か自ら確かめに来ただけだ」

張遼「噂？」

公秦「知らないのか？董卓が圧政をしていると言っ噂を？」

その言葉で今まで無言だった將軍達も反論した。

華雄「なんだと！月が圧政だとふざけた事を言っな！」

呂布「・・・月悪い事してない」

陳宮「そうですね、そんなことするはずがありません」

（さすが董卓、信頼が厚いな・・・）

公秦「まあ、確かに噂は嘘だったが他の諸侯は動き出してるぞ」

張遼「ありえへん・・・」

一気に場が重くなった。

賈馱「その話詳しく聞かせて」

公秦「ああ、いいだろう主格は袁紹に間違いはない、続いて劉備軍、曹操軍、袁術軍（孫策軍）と動き出してる」

賈馱「・・・最悪だ・・・」

公秦「後半月もすれば馬鹿猿が反董卓とか名乗って攻め寄せてくると予想される」

そう言っていると横から華雄が話してきた。

華雄「ならお前はどちらにつくんだ？」

公秦「もちろん董卓軍につく」

その言葉で場はほっとした。

公秦「俺はもう1つ用事があつてきたんだ」

賈馱「用事？」

公秦「ああ、董卓軍と同盟を結ぶためにきた」

その言葉に全員が驚いた。

張遼「・・・ごめんな、ほんまごめん」

張遼は謝ってきた。

公秦「気にするな、偽名を使った俺も悪い」

張遼「せやけど・・・」

公秦「くどいと男に嫌われるぞ」

張遼「!!」

張遼「わかった／＼／」

ふと玲封を見ると握りこぶしを作っていたまあ理由はわからんが。

その後非公開に同盟を結び改めて自己紹介をした。

公秦「俺の名は公秦、字は玄龍だよろしく頼む」

玲封「私の名は玲封、字は海栄よろしく願います」

張遼「うちの名は張遼、字は文遠やよろしゅうな」

華雄「私は華雄、字は無いがよろしく頼む」

呂布「・・・恋は・・・呂布・・・奉先」

陳宮「音々は陳宮、字は公台ですぞ」

賈馮「僕は賈馮、字は文和改めてよろしく」

董卓「私は董卓、字は仲穎です」

ちなみに本名は將軍達のみ教えて兵達には客將延涼と名乗っている  
同様玲封も法鮮と名乗っている。

しばらく董卓達と話していると張遼が声を掛けてきた。

張遼「なあ、公秦うちと勝負せいへん？」

公秦「・・・別にいいが勝負はわかっているぞ」

張遼「それでもしたいんや」

公秦「そうかなら行くか」

張遼「ほんまか？」

公秦「ああ」

張遼「じゃあ、行くで」

俺達は訓練場へ向かった

張遼は着くと早々愛刀の飛龍偃月刀を構えた。

俺も習って月光を構えた。

張遼「珍しい刀やな」

公秦「ああこれか？これは遙か東の国の物だ」

張遼「そうなんか、じゃそろそろ行くで」

公秦「ああ」

その言葉を筆頭にさすが神速と言われる速さで斬りかかってきた。

公秦「さすが神速だな」

張遼「無駄口は叩かない方がいいで」

今のところ公秦は防御の一点張りだった。

張遼「なんで攻撃せえへん？」

公秦「様子見だよ」

張遼「それなら決めさせてもらうで！」

張遼「蒼龍神速撃！」

確かに速度は速いが少し大振りになったため隙が生まれた。

その隙を俺は見逃さなかった。

公秦「知らないのか、一番隙を見せやすいのが大技を出している時だ」と

その言葉と同時に最初より1・5倍ほど速くなった突きを軽々と避け張遼の首元に月光を突きつけた。

張遼「・・・うちの負けや」

張遼「ほんま強いな公秦は」

公秦「いや張遼こそ、雷神の將軍達と互角だったぞ」

張遼「そうか・・・霞や」

公秦「ん？」

張遼「真名は霞や」

公秦「いいのか？」

張遼「くどいと女に嫌われるで」

公秦「それもそうだな・・・真名は陸だ」

張遼「よろしゅうな陸」

公秦「ああよろしくな、霞」

華雄「そうか霞が教えるなら私も教えないとな、私の真名は秋沙<sup>あいや</sup>だ」  
いつの間にか將軍達が集まっていた。

呂布「・・・恋・・・真名」

陳宮「ぬぬ・・・ねねは音々音ですぞ」

賈馱「僕は詠、陸よろしく」

董卓「私は月です、よろしく願いします陸さん」

玲封「これ私も言った方がいいのかな・・・」

心の中で言っただつてもりが・・・

陸「声に出てるぞ」

そう声に出してしまっていたのだった。

玲封「／／／」

玲封「私は涙です」

こうして真名を預けた俺達は夜宴を開いたのだった。



一戦、公秦VS張遼（後書き）

どうも^^李駿です。

華雄の真名はわかつての通り姫神の名を使っています。

姫神ファンの皆さんどうかお許しを

## 夜宴、董卓とその仲間達（前書き）

どうも、お久しぶりです、正直スランプ中でした、何とか終わったので出します。今後不定期ですが搭載したいと思うので応援よろしくお願いしますm（- -）m

## 夜宴、董卓とその仲間達

董卓と非公開同盟を結んだ夜、俺達は董卓達の宴に招待された。

俺たちが来るとまだ月と詠は来ていなかった。

霞「なんや遅かったな陸」

陸「すまんこちらも事情あってな」

霞「まあええではよ座りな」

俺は霞の横に座った。俺が来た後直ぐに恋が来て俺のもう片方の横に座った。

恋「・・・恋も横座る」

そう言い終えた瞬間背後から殺気を感じたような気がした。

恋は俺の右隣に座り肉まんを食べ始めた。

恋「もきゅもきゅ・・・」

・・・やべえマジで可愛い・・・俺はついつい恋に見惚れてしまった、背後の殺気を感じながらも・・・そして

音々「ぬぬぬ、恋殿に触るな！、ちんきゅーきつく！」

もちろん俺は気づいていなかった、そして気づいたときはもう顔の

前まで蹴りが来ていた。

当たったと思ったが衝撃はなかった。ふと見てみると恋が見事に音々をキャッチしていた。

恋「・・・ちんきゅー邪魔しちゃ駄目」

恋は軽く音々を睨んだ。

音々「ですが恋殿、『邪魔しちゃ駄目』・・・わかりましたぞ」

口では喋る事はなかったが顔はおもいつきし俺を睨んでいた。

1時間歩度経つと月と詠が仕事を終えやってきた。

月「おっ遅くなってすいません」

月は君主であるのにペコリと一礼して入ってきた。

詠は何も言わず入ってきた。

陸「月、一々礼なんってしないでいいぞ、俺達は月の配下だからな」

俺が言つと月は謝ってきた。

月「へうすいません」

俺はこのままではちが明かないと思い、俺はその場を立って月の頭を撫でた。

月「へう何をするんですか？」

そう言い返され俺は少々考えた

陸「謝る月が可愛かったからついな」

それを聞いて月は顔を少し赤くした。

その後視線が熱い事に感じた特に俺が居たところから・・・

恥ずかしくなった俺はすぐに席に座り飲みまくった、もうべろんべろんに。

俺が寝た後最初に近づいたのは霞だった。

霞「陸ももう寝たんか？」

返事が無いことを確認した霞は考え、1つ閃いた。

閃いた事とは・・・

霞「うちも眠たくなつたからお先に失礼するわ、あっおまけに陸を部屋に運んどくわ」

そう言いその場を出て行った。

董卓勢「「「「「！！」「」「」」」」

董卓勢はその言葉に驚いた。普段は驚かない恋さえも驚いていた。訳は・・・霞が目の前に酒があるのにそれを飲まず寝ると言ったか

らだ。長年付き合っていた秋沙は霞がしよつとする事を悟ったらしく、恋と涙を連れてそそくさと出て行った。

陸の部屋に向かう廊下の中秋沙は独り言を言った。

秋沙「霞、陸の独占は例え友であつても許さん！」

その言葉は恋、涙に聞こえようやく霞がしよつとしている事を理解した。

ちなみに音々は秋沙に強力な酒を無理やり飲まされ寝ていた。

延涼の部屋、

華雄達が丁度部屋の扉を開けたとき、霞は陸の上に乗って陸の口を自分の口で塞いでいた。

それを見た秋沙は怒鳴ろうとしたが霞に止められた。

霞「しいー、陸が起きたらあかんやろ」

その言葉に何とか怒鳴ることを抑えた。

霞は仕方が無いと思い言った。

霞「しゃあない、皆で楽しもうや」

その場にいた全員が同意したのだった。

もちろん俺はそんなこと知ること無く寝ていたのだった。

夜宴、董卓とその仲間達（後書き）

これからも頑張ります^^

翌朝、後悔しても後の祭り（前書き）

正直、超短いです。次回はもう少し書くようにします。



## 翌朝、後悔しても後の祭り

翌朝、俺はなぜが腰を痛めながら起きた。

陸「・・・不幸だ」

とある小説の主人公のような口調をしてしまった理由は

霞「スヤスヤ」

恋「Z～Z～」

秋沙「Z Z Z Z Z」

涙「Z Z」

この4人のことである。

陸「なぜ裸で俺の横で寝てるんだ・・・」

そうただ寝てるだけならいいが裸で寝ているのだ、しかも俺は夜の記憶はない。

酔っ払った状態でもしや俺は・・・今更後悔しても後の祭りだった。

1時間程度経つとまず霞が起きてきた。

霞「おはよう、陸」

陸「ああ、おはよう霞」

最初は普通の挨拶だが次の言葉は爆弾発言だった。

霞「もし子が出来たら名前どうないでしょうか？」

・・・言いやがった、まだ3人寝ているのに一発目から弾道ミサイルを落としやがった。

続いて涙が起きた。

涙「おはよう御座います陸様」

陸「ああ、おはよう」

これまた次の言葉は爆弾発言だった。

涙「・・・側室でいいのでよろしくお願いします／＼」

今度は水素爆弾を落としやがった・・・まだ2人あるのか・・・おれの心はもう焼け野原だ・・・。

次に秋沙が起きてきた。

秋沙「おはよう、陸」

陸「おはよう、秋沙」

まあまあパターンの最初に最初はわかっていた次だ次果たして俺は耐えられるか・・・

秋沙「まさか私が大人になるとはな・・・」

思ったよりきつくはなかったが大空襲クラスだな・・・

そして最後に恋が起きた。

恋「・・・おはよう陸」

陸「恋おはよう」

どんとこい俺は乗り越えるぞ・・・

恋「・・・これで恋は陸のお嫁さん」

・・・ああ、終わったぞ、最後は核を落としやがった・・・。

すかさず俺は土下座した

陸「すまん、俺は大変な事を・・・」

霞「大変な事？なにいつてんねん？」

涙「主お顔を上げてください、主は悪い事していません」

秋沙「そつだぞ、2人の言うとおりだ」

恋「・・・？」

・・・無理だこんな状況記憶に御座いませんじゃすまねえ・・・

陸（汪牙にばれたら俺どうなるかな・・・、これじゃあ一刀と一緒じゃねえか、はあ〜）

陸「こ・・・これからよろしくな」

4人は嬉しそうに頷いた。3人に聞かれてるのも知れずに

音々「ぬぬ・・・恋殿〜」

月「へう・・・見てはいけないものを見てしまいました・・・」

詠「まさか一晩で4人つて・・・」

俺達はそんなことも知らずに話していたのであった。

## 幕開、集結反董卓連合

あれから4ヶ月が経った、華雄は特訓で猪癪を最小限に抑えることに成功した。

そしてとうとうその日が来た。

伝令「反董卓軍が集結しつつあります」

賈馱「わかった、下がっていいよ」

伝令「はっ」

賈馱（陸が予想したより少し速く動いたわね・・・）

急遽俺達は王座に呼ばれた。

詠「皆に聞いてもらいたいことがある」

將軍達「・・・」

詠「反董卓軍が動き出した、次々と諸侯達が集い始めている」

陸「予想より早いな・・・」

詠「私達は？水関と虎牢関で防御、相手の兵糧が無くなるまで耐えるそうすれば勝てる」

陸「ああ、確かにそれで構わないだろ、ただそれじゃあ月に汚名を  
きせられたままだぞ」

詠「じゃあ僕達はとうすればいい??」

陸「簡単だ、反董卓連合を潰す」

その場にいた全員『!!!』

詠「それじゃあもつと月の評判が悪くなるじゃないか!」

陸「勝ったなら奴らに条件として洛陽の噂は袁紹の企みによる嘘と  
漢中に流せと条件を出せばいい、事実本当だからな」

詠「数ではあちらの方が上、兵の差でも勝てるかどうか不安な状態  
でどう勝てばいい?」

陸「忘れちゃ困るが俺は軍を率いているんだ、それを併せれば充分  
勝つ事が出来る」

詠「じゃあその軍は今何処にいるんだ?」

陸「反董卓連合の中さ」

全員『!!!』

一気にその場は重くなった。

霞「今陸なって言った?」

明らかに殺意を向けて話してきた。

陸「心配するな、裏切るのは反董卓連合だ、月達を裏切るなんて絶対にしない」

霞「ほんまか？」

陸「ああ神に誓って」

・・・

霞「・・・陸は嘘つけへんからな信じたる」

秋沙「私も陸を信じおう」

恋「・・・陸嘘ついてない恋は信じる」

音々「・・・恋殿が信じるなら信じますぞ！」

詠「・・・」

將軍達は信じてくれたが、さすがに詠はまだ信じられないようだった。

月「私は信じます」

その言葉で決心したのか詠も信じてくれた・・・さすが月だ。

詠「月が信じるなら・・・僕も信じるよ」

陸「信じてくれてありがとうな」

俺は嬉しく笑顔で答えた。

月「へうそっそんなことないです」

秋沙「仲間を信じるのは当然だ」

・・・俺を仲間だと思っていてくれたのか正直嬉しい

霞「当たり前やろ、陸はうちの旦那さんやから／＼」

・・・やめてくれ、こんな一大事の際にその言葉は・・・ってもう遅いか、俺に視線が釘づけになってやがる。

涙「霞！陸様は私の物です！」

・・・やっぱりか、予想はしていたが・・・

秋沙「それは違うぞ涙！陸は我々の共有物だろ」

・・・は？俺はいつから物に成り下がったんだ・・・

涙「・・・そうでしたすいません秋沙將軍」

すんなり謝る涙・・・実はというと華雄は猪癖を解消した後才能が開花し今では涙よりも強くなっているの歯向かう事が出来なかったと言っただけだが。

次の瞬間涙を含めた3人に詠が制裁した。



ゴツンッ

詠「あんた達今の状況わかっているわけ？」

3人『・・・』

その後3人は1時間みっちり鬼人モードになった詠に説教されたのは言うまでもなかった。

一方反董卓連合では・・・

反董卓軍陣営

袁紹「遅いですわね・・・」

劉備「公秦様まだかな？」

曹操「なぜアイツの軍はいつも遅いのかしら？」

孫策「まあまあいつもの事でしょ」

曹操「・・・それもそうね気軽に待つわ」

ちなみに約束の時間より1時間遅い。

その30分後伝令が現れた

伝令「？陵の雷神が到着しました」

曹操「分ったわ、下がちなさい」

伝令「はっ失礼します」

その場にいた全員がやつと来たかという表情をした。

そしてやつとあの男が天幕に入ってきたのだった。

公秦「いやゝすまんすまん、途中賊に出くわして遅れてしまった」

・・・

曹操「・・・それなら仕方がないわね」

劉備「大丈夫ですか？」

公秦「心配してくれてありがとうな、大丈夫だ問題ない」

孫策「ふうこれでやつと全員そろったわね」

ちなみに今回はただの集合だけであるまた後日作戦会議が開かれるのだ。

そのためもう天幕を出て行った諸侯もいたのだった。

公秦「それじゃあ俺も失礼する」

そう言い天幕を出ようとした時、孫策に捕まってしまった

孫策「陸ゝ久しぶりね、まさか貴方が太守になるなんて思っても見

なかったわ」

公秦「孫策、久しぶりだな、すまんが俺は用事があるんだまた後でな」

そう言い公秦は天幕を去っていた

孫策「ちよつと待って！」

そう声を出して天幕を出たが公秦の姿はなかった。

（・・・おかしいわ、なぜ私を真名で呼ばなかったの？）

そう疑問を残した孫策だった。

## 幕開、集結反董卓連合（後書き）

不定期ですが更新はしていくつもりですよろしくお願いします^^

前線、？水関の戦い（前書き）

どうもお久しぶりです^^楽しんでください^^

## 前線、？水関の戦い

俺は今？水関にいる、ちなみに？水関とは洛陽を守るための門（砦）である。それ以外にも後方に虎牢関という難攻不落の関がある。

？水関に配置されている将は延涼（公秦）、華雄、張遼である、華雄の猪癖は地獄の猛特訓で何とか抑えることが出来たので心配はないと思うがな・・・

虎牢関には呂布、陳宮、法鮮（玲封）が配置されている。

まあ俺的には？水関のみで反董卓の連中を潰す予定だが一応虎牢関にも配置されている。

張遼「延涼、そろそろやで」

延涼「ああ、分った」

俺は自室から門の上へと向かった。

雷虎隊隊長「延涼様全員配置につきました」

延涼「分ったその場で待機しろ」

雷虎隊隊長「はっ」

俺は奴らが来るのを今か今かと待っていた。

一方反董卓連合はというと・・・

袁紹が適当に配置を決めていた。

袁紹「それでは発表しますわ、まず前衛に劉備さん、右翼は公秦さん、左翼は曹操さん、中堅が私、右翼後方が劉表さん、左翼後方が孫策さん、後の方は後方で援護もしくは待機ですわ」  
・・・

その場が沈黙したなぜかと言うと・・・一番兵数の少ない劉備軍が前衛を任されたからだ。

さすがの劉備もこれに反論した

劉備「私達の数では董卓軍に敵いません」

袁紹「・・・仕方ありませんわね」

その言葉に劉備は安心したが次の言葉に呆気に取られた。

袁紹「私の軍を貸してあげますわ、それなら文句はないでしょ？」

劉備「・・・わかりました」

結局劉備は前衛を任されることになった。

劉備軍陣営

劉備軍は他の軍より少し遅れていた理由は劉備が決心できていなかったからだ。

劉備「・・・どうしよう」

そこへ劉備の信頼できる仲間達が声を掛けてきた。

諸葛亮「大丈夫です、華雄は猪武将として有名です、何とか誘い出せば適わないことはありません」

関羽「義姉上、私が見事華雄の首を取って見せましょう」

張飛「大丈夫なのだ、鈴々にかかれば董卓軍なんてちょちょいのぷーなのだ！」

趙雲「主、我々を甘く見てはこまりますな、必ずや敵将を討ち取りましょうぞ」

劉備「・・・皆ありがとう、うん私頑張るよ」

劉備は自信を取り戻し前へ進もうと決心したのだった。

劉備「そろそろ私達も行かないと」

関羽「聞いたか？皆の者出撃だ！」

兵達『オー！』

劉備軍は？水関に向け出撃したのだった。

場所が変わって、？水関

延涼「やっと来たか、待ちわびたぜ、やはり前衛は劉備軍か」



まあ予想はしていた、史実では確か関羽が華雄に罵倒を浴びせ門から誘い出したんだよなでも俺がいるから大丈夫だろう・・・そうだいい事思いついた。俺はニヤニヤしながら戦場を見上げていた。

霞「どうしたん？ニヤニヤして？」

霞は不思議そうに声を掛けてきた。

延涼「いやこれから起こることを考えると楽しくてな」

霞「??？」

霞は理解ができずそのまま立ち去った。

その少し後俺は雷虎隊隊長を呼んだ。

延涼「隊長、隠密がうまい奴一人呼んできてくれ」

雷虎隊隊長「はっ」

数分後・・・

雷虎隊隊長「連れてきました」

延涼「そうか、ご苦労」

隊員「なんでしょうか？」

延涼「これを李駿に渡してくれ」

俺はそういい手紙を渡した。

隊員「はっ畏まりました」

隊員はそう言い姿を消した。

延涼「隠密隊を少し入れたのが吉と出たな」

雷虎隊隊長「そうですね」

俺達はそう言い戦場を見上げた。

蜀陣では・・・

諸葛亮「皆さんお話があります」

関羽「どうした、朱里？」

武将達は作戦室に呼ばれていた。

朱里「ここに呼んだのは私が考えた策を皆さんに聞いてほしいからです」

趙雲「策とはなにですか？」

朱里「えーと、まず愛紗さんと星さんが華雄を挑発します、その後怒り狂って出てきた華雄部隊を鈴々ちゃん達の部隊とお2人の部隊で殲滅します、但し華雄は愛紗さんと一騎打ちしてもらいしゅす」

最後の最後で諸葛亮は噛んでしまい少し顔が赤くなった。

愛紗「なぜ、華雄の相手は私なんだ？」

朱里「私達の名声をより良く上げるためです」

愛紗「承知した」

その頃雷神陣営・・・

李駿「なに奴！」

李駿は気配を感じ斧を構えた。

雷虎隊隊員「李駿様、公秦様から文です」

李駿は文を受け取り目に通した。

李駿「・・・承知した」

内容を理解し隊員に返事した。

その後隊員は姿を消していた。

李駿「さすが嘉威仕込みの隠密隊だ」

そう言い天幕から出て行った、各將軍に知らせるために。

数分後、隊員は？水関に戻ってきていた。

雷虎隊隊員「李駿様に文をお届けしました」

延涼「わかった、直ぐ配置につけ、今回は陣じゃないからな」

雷虎隊隊員「はっ」

数分後、劉備軍の中から2人の女が？水関に向かってきた。

やはり関羽か・・・もう1人は趙雲だな。

その2人は予想していた通り華雄を罵倒した。

関羽「聞けえ、我が名は関羽、劉備元徳の将なり、華雄ごとき私人で成敗してくれるわ！」

「

関羽「主も武将なら正々堂々私と勝負しろ！」

・・・横の華雄は口を押さえて笑っていた。

華雄「馬鹿か貴様は、籠城している我々が関は捨てて出て来いと？なぜ自ら盾を捨てねばならん？」

ちなみに今は準備運動みたいなものである。

そして今まさに華雄罵倒戦が始まろうとしていた。

関羽「・・・拍子抜けだな、勇敢な將軍と聞いて主から願い出てきたものの、こんな臆病者だったとは、恥を知れ、恥を！」

華雄「貴様、今なんと言った！」

関羽「腑抜け將軍と言ったんだ、どうせ武もたいした事がないだろう」

華雄「貴様、私の武を愚弄するつもりか！」

・・・笑ってやがる、わざと怒っているフリをしているな華雄は

関羽「これまで言ってまだ出てこないのか、貴様は亀か？今からその？水関から出してやる」

そう言い関羽は隣にいる趙雲に合図を送った、そしてその合図を聞いた趙雲が華雄の牙門きに向けて矢を放った、その矢は見事旗を貫いた。

華雄「きつ貴様、よくも！今から貴様の首の取ってくれる！」

関羽「早く降りて来い、貴様など私の刀の錆にしてくれるわ！」

関羽達はこれで怒り狂った華雄が出てくると思ったが実際違かった。

華雄「その前にお前達に私からの贈り物をくれてやる」

2人「??」

そう言い華雄は背後に配置していた兵に命令した、その兵は火矢を作りそのまま先ほど愚弄していた2人の牙門旗に向けて矢を放ったのだった。

その矢は見事旗に直撃し旗は燃え塵となった。

それを見た2人は呆氣に取られていた。

華雄「・・・クククははは、まさか本当に出てくると思っていたのか？私はそんなに軽い女ではない、ははは」

・・・一気に形勢は逆転した、趙雲は冷静を保てたものの、関羽は怒っていた

関羽「・・・よくも・・・よく私をコケにしてくれたな、出て来い華雄、もう作戦などどうでもいい、貴様を叩き斬ってやる！」

趙雲「やめろ、愛紗、これでは敵の思ふ壺だ」

趙雲は関羽を押さえつけたがそれを関羽が振りほどいた。

華雄「そんなに私と戦いたいなら戦ってやってもいいぞ、少し待て」

そして華雄は俺に振り向いた。

延涼「上出来だ」

華雄「陸／＼／」

そう全て公秦の策略だったのだ。

延涼「じゃあそろそろ延涼という衣を脱ぐか」

公秦「それじゃあ行ってくる」

華雄「陸がんばって」

張遼「期待してるで旦那様」

公秦「おいおい、それはやめろ」

そう言い俺は天に向かって超電磁砲を放った。

意味？それはこれからのお楽しみだ。

そうして俺は？水関から飛び降りた。

・・・それも見た2人はただ呆然としていた。

公秦「よう、久しぶりだな、関羽」 休息を参考

・・・返事はなかった、少し経つと2人は我に返りこう言った

2人「なぜ、貴様がいる？」

公秦「めんどくさいから後だ」

俺は大声で言った

公秦「聞けえ！雷神の勇士達よ董卓の噂は偽りであった、これより我が軍は董卓につく武器を持てえ！敵は反董卓に在り！」

雷神軍では・・・

李駿「聞いたか？これより我々は後方の劉表、袁紹討つ、全軍反転、敵を殲滅せよ！」

雷神兵「」「」「オォー」「」「」

雷神軍は反転し劉表、袁紹軍を殲滅しにいったのだった。

少し時間を遡り孫策軍では・・・

孫策「今の見た冥琳？れーるがんよね？」

周瑜「・・・はい」

孫策「撤退よ」

周瑜「ですが・・・」

孫策「今のうちに撤退しておかないと取り返しのつかないことになるわ」

周瑜「・・・わかりました」

周瑜「全軍撤退！」

兵長「ですけど」

周瑜「命令だ」

兵長「はっ」



孫策軍は撤退して行ったのだった。

そつあの超電磁砲は仲間と知人（孫策）に知らせるための物であった。

元に戻って？水関前

公秦「華雄の代わりに俺が相手になってやるよ」

関羽「なぜ貴様が出てくる私が呼んだのは華雄だ！」

公秦「そりゃ自分の女貶されたら我慢できないだろ普通？」

関羽「・・・女だと？・・・貴様許さん！！！」

突如激怒した関羽が突進してきた。

公秦「おっとそれじゃあ昔の華雄・・・いや太史慈以上だな」

そう言いながら左右によけ続ける

公秦「お前の方が猪將軍に相応しいな」

関羽「死ね！死ね！死ねえ！！！」

怒りに身を任せて獲物を振っているため、隙がありすぎる、俺は軽々斬撃を避けていく、もし相手が俺ではなかったらとうに首を刎ねられているであろう。

公秦「ここまで見てみると哀れんでくる、今の貴様なら俺の兵でも軽く倒せるぞ……」

関羽「うるさい裏切り者の逆賊め！さっさとその首をよこせ！」

・・・ブチッ、

何かが切れる音がした、しかも俺の頭付近で。

公秦「・・・ふざけんじゃねえ！月はみんなの幸せを祈ってこれまで頑張つて来たんだのにてめえらのせいで全て水の泡だ、大方貴様らは月が無害だと知っていたんだろう？それなのに襲ってきたどう考えてもてめえらの方が賊じゃねえか！」

関羽「世のためだ、董卓には犠牲になつてもらうしかない！」

公秦「・・・わかった、一撃で決めてやるよ」

関羽「やれるものならやってみろ！」

俺は双刀を鞘に納め、日本刀を納めたまま柄を持ち居合いの構えをした。

公秦「居合い、雷鳳」

シュッ　ズバーン

関羽「ぐはっ」

俺の一撃で関羽は倒れた。

公秦「劉備の将、関羽、この公秦が討ち取ったり!!!」

まあ殺してはないが……

これにより劉備軍を始め残っていた諸侯も撤退を始めた。

そう、初戦の戦は董卓連合の勝利に終わったのだった。

## 前線、？水関の戦い（後書き）

正直袁紹覇アニメ以上の馬鹿キャラでいきたいと思います。  
これからも応援よろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7554p/>

---

真・恋姫†無双～雷の貴公子～

2011年11月23日13時52分発行